
機動戦士ガンダム 英雄黙示録

京勇樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

機動戦士ガンダム 英雄黙示録

【Nコード】

N7601V

【作者名】

京勇樹

【あらすじ】

新太陽暦73年人類は未だに争い続けていた。

この物語は激動の時代を生きる少年少女達の物語である。

すいません多少題名を変更しました

ブローグ2年前の戦い（前書き）

えー、此度は私京勇樹の拙い作品を読んただきありがとうございます

多少の無茶は眼を瞑ってください。

今後のためにコールサインを変更しました

プロローグ2年前の戦い

新太陽暦73年

人類が宇宙に進出しコロニーが建造されて住むようになってから半世紀以上が経過していた。

そんな新太陽暦73年もあと数日で新しい年を迎えようとしているある日。

人間同士の争いがここ<初音島>でも繰り広げられようとしている時
モビルスーツ
人型機動兵器MSのコクピットの中でとある少年は2年前のことを思い出していた。

？「あの時の俺は無力だった、だけど今は……」

ピピピ！コクピット内に音が鳴り響いた、どうやら通信のようだ

柏木「こちらレーヴァテイン4 柏木機、土見聞こえる？」

稟「こちらレーヴァテイン3 土見機聞こえる、感度良好」

柏木「なに怖い顔してんの？リラックスリラックス！」

稟「お前ね少しは緊張しとけて、2年前の戦争を思い出してた」

柏木「あー、タイタン戦争か……」

そう今から2年前の新太陽暦70年〜71年

今は全滅したと言われている20mを超す巨人達、国際呼称<タイタン>との戦争があった。

今でも目を瞑れば思い出す、あの時の無力感、絶望感を稟は一生忘れないだろう。

新太陽暦70年8月某日、突然そいつらは現れた。

突如現れた巨大な門、その門から大拳として現れる頭に四角い兜を被った6眼の巨人達。

巨人達は世界中に対して侵攻を開始した、当初各国の軍隊は戦線を維持、優勢だった。

しかし約3ヶ月後、タイタン側に航空生物兵器ドラゴンが出現。ドラゴンの出現により各国の戦線は崩壊、各国は後退しつつ戦線を構築したが長くは持たなかった。

この時の世界各国の主力装備は多脚戦車と空軍の戦闘機、海軍の戦艦だった。

タイタンの装備は最初大剣に、腕に直接付いてる大砲に巨大な弓矢だった。

しかしドラゴン出現と同時期に盾を持つ各種タイタンや、巨大な盾を持つタイタンが出現したことにより、砲弾の効果は著しく低下し、意味を成さなくなった。

そこで世界各国は新兵器の開発を急務とされた。

戦車以上の火力と戦闘機並みの機動力を持ち尚且つ3次元機動を併せ持つ兵器を。

しかし開発は難航した、戦車の主砲以上となると、更なる大口径化かビーム兵器しかないからだ。

当時ビーム兵器は戦艦クラスにしか搭載されておらず、ビーム兵器の小型化は困難を極めていた。

もし小型化できたとしてもエネルギー量の問題もあった。

新太陽暦71年1月某日、しかしそこに一筋の光明が見えた。

海洋中立都市国家<初音島>の天枷研究所が新概念の機動兵器を世界に向けて発表した。

それが人型の汎用機動兵器MS<モビルスーツ>だった。

天枷研究所は世界でも名の知られたロボット研究の最先端だった。

しかし、世界は最初天枷研究所が発表したMSに対して懐疑的だった。

そこで天枷研究所は提案した、今から我らが開発したMSの威力を御見せしよう、と、

天枷研究所はMS隊を日本に派遣した。

天枷研究所がMS隊を派遣を決定して1週間後
とある町が紅蓮の炎に包まれていた。

その炎に包まれてる町を3人の少年少女が走っていた。

？「はあはあ・・・楓、桜急げ！」

楓「はあはあ、・・・待つてください、・・・稟くん！」

桜「楓ちゃん早く！」

3人は炎の町の中を兵士に誘導されながら走っていた。

1番先を走っている少年は身長170cmくらいで顔立ちは丹精で
髪は耳を隠すくらい名前は土見 稟

真ん中に居るのは黒髪で腰に届くほど更に左右にリボンで纏めら
れてる髪が印象的な大和撫子と言言葉が似合う少女名前は八重 桜
少し遅れて走っているのは明るい茶色の髪で肩まで届くくらいで赤
いリボンを結んだおとなしい印象の少女名前は芙蓉 楓
少年達は炎を避けながら兵士の居る方向へと走っていた。

稟「楓、桜！急げ後少しだ！」

その時だった

ドーーーーー！

稟「うお！」

桜「きゃー！」

ものすごい衝撃が走りまともに立つことすらできなかった。

稟「いてて、楓、桜大丈夫か？」

桜「私は平気、楓ちゃんは？」

しかし楓からの返事は無い。

稟「まさか・・・」

稟は恐る恐る振り向いて楓が居た辺りを見たが、そこにあったのは
巨大な足があった。

桜「そんな・・・楓ちゃん・・・」

巨大な足元には楓の髪に結んであった赤いリボンと千切れた腕が転
がっていた。

稟「楓・・・そんな・・・楓ーーーーー！」

すると目の前に居たタイタンが手に持っていた大剣を振り上げた。

稟（俺ここで死ぬのかな、でもせめて桜だけでも！）

稟は後ろに居た桜を突き飛ばした。

そして稟は死を覚悟して眼を瞑った。

ドキューーーーンドキューーーーンドキューーーーン！！！！

という轟音が響いた、稟は何時までたってもこない痛みを不思議に思い眼を開いた。

目の前には大剣を振り上げた状態で固まってるタイタンが居たが、そのタイタンもゆっくりと倒れた。

稟は呆然としていた、一体誰が助けてくれたのか。

キーーーーン！

その時戦闘機のような音が聞こえた、稟は音のした方向を振り向いた。その方向から人型の巨大なシルエットがこちらに飛んでくるのが見えた。

桜「稟くん大丈夫ですか！？」

どうやら桜が駆け寄ってきてきたらしい。

稟「ああ、俺は大丈夫だ」

桜は泣きながら稟に抱きついている。

そして稟たちの前に人型の機体が着地した、目の前に着地した機体は赤青白の3色が印象的な機体だった。

？「その君達生きてるな！？」

どうやら目の前の機体から発しているらしい声を稟は聞いた。若い声だった、自分達と同年代くらいではないかとすら思えた

稟「はい、大丈夫です！」

？「よし！では少し待っていてくれ！今桜武の高機動車と歩兵部隊を呼んだから」

稟は驚いた。

稟（桜武だって！？あのMSを発表した初音島の軍隊！）

桜武は初音島が日本から独立した際に組織された軍隊で正式名称は

初音島統合防衛軍である。

確かに機体の右肩には桜武の証の桜の花の上に盾と日本刀が斜めに重なったマークがペイントされている。

稟（これがMS・・・人類の新たな力！）

稟は目の前の機体を見上げ、視線を下げながら拳を握った。

稟（俺は力が欲しい！大切な人を守る力が！！）

稟は改めて目の前の機体を見つめた。

これが英雄と呼ばれる少年と土見稟の出会いだった。

この戦いの後、初音島の派遣した部隊は約2週間で日本からタイタンを駆逐した、その性能を見た各国の軍関係はMSの本格的導入を決定した。

ここから人類の反撃が始まるのだった。

そして新太陽暦71年12月末日タイタンは世界から駆逐された。

ブローグ2年前の戦い（後書き）

はい、始めました英雄黙示録ですが、一応誤字脱字は気をつけて
ますがなにかあったら一報ください

2年前の戦い *sides* Y (前書き)

遅くなりました

2年前の戦い side S Y

？「もうすぐ人間同士の殺し合いが始まる・・・」

暗い部屋の中、1人の男がベッドに腰掛け両手で顔を覆いながら呟いた

？「義之^{よしゆき}、大丈夫？」

何時の間に起きたのか、背後に体にシーツを巻きながら眼鏡をかけた女性が優しく声をかけてきた。

義之「ああ・・・正直少し怖いかな、ありがとう麻耶^{まや}」

桜内義之は最愛の恋人の沢井麻耶^{さわいまや}にそう返事した

麻耶「ううん、それで良いと思う、今回は人の命を奪ってしまうんだから」

そう、今回の戦いは自分と同じ生きた人間だ、前大戦のくタイタン>じゃない。

義之はそう思いながら目を閉じて、今でもはっきり覚えている2年前のタイタン戦争を思い出した

今から2年前、新太陽暦71年8月末日、場所は初音島

義之「はあはあ、これで何体倒した？」

義之は愛機の武装15・78m対艦刀シュベルト・ゲベールをタイタンの死骸から抜きながら呟いた

パイロットスーツのヘルメットの無線からは、味方の怒号や悲鳴、救援要請の聲がひっきりなしに響いている

義之「とうとう、俺だけか」

最初は義之の駆るストライクを含めて16機居たが、今は義之のGAT-X105ストライクだけが砂浜に立っていた。

その証拠に周囲にはM1アストレイの残骸が散乱していて、しかしそれ以上にタイタンの死骸が砂浜を埋め尽くしている。

電子音が響くとサブモニターに顔が映った

ヘッドクォーター

麻耶「こちらHQ！ストライク、義之大尉聞こえますか？」

義之「こちら義之聞こえる、こっちは俺以外全滅した、繰り返す俺以外全滅した」

麻耶「HQ了解、先ほどそちらの地区に向かう移動熱源及び震源検知、規模は連隊規模よ」

義之「おいおい、そんな数俺1人じゃ対処しきれない！」

麻耶「大丈夫、そっちに援軍が向かったから」

義之「援軍？一体誰が・・・」

そう言った瞬間コクピット内に警告音の大合唱が鳴り響いた！

義之は慌てて機体を右にステップさせた

先ほどまでストライクが居た場所に光弾が当たり、クレーターが出来た

義之は上を見た

義之「ドラゴンか！？」

上空に10数体のドラゴンが居た、しかもその内の1体が今まさに攻撃を放とうとしている

義之「やばい！」

ストライクは着地したばかりで動けない、万事休すかと義之は思った、その時だった

？「ほらほら弟くん油断しないの！」

その声と同時に攻撃を放とうとしたドラゴンにレールガンとミサイルが命中し、ドラゴンは墜落した。

義之「この攻撃はデュエルAS！アサルトシミュラウドまゆき先輩！」

まゆき「やつほー！弟くん無事みたいだね」

その声と同時にストライクの右側にベースジャバーに乗ったデュエルASが着地した

まゆき「こっちに来たのはあたしだけじゃないよ」

？「同志桜内は無事か」

声が聞こえたと思ったら海中から現れたタイタンに3本の槍みたいな攻撃が刺さった

義之「今の攻撃はブリッツの！杉並か！？」

杉並「ふむ無事で何よりだ、同志桜内」

杉並の操るブリッツもベースジャバーに乗って現れた

？「ほらほら、油断しちゃ駄目だよ？義之君」

大量のミサイルがドラゴンの群れに飛来していくのと同時に声が聞こえた

義之「今のミサイルはバスター！ってことは菊理さん！」

後ろには、今まさにミサイルを放った証拠であるランチャーから煙が出ているバスターの姿が有った

菊理「間に合って良かった、流石にこの数は1人だと厳しいからね」
菊理はそう言ってウインクした。

？「ふむ、全機集合したみたいだな」

そして上にはベースジャバーに乗ったイージスが居た

義之「伊隅隊長！」

伊隅「さてここは我々が防衛するぞ！タイタン共を1匹たりとて通すな！！」

全員「了解！！」

無線に仲間達の声が響く、義之は気合を入れ直して操縦桿を握りなおした

杉並「同志桜内！掴まれ！」

ストライクの上にブリッツの乗るベースジャバーが来た

義之「ああ！」

ストライクはベースジャバーの下にある取っ手を掴んだ

ベースジャバーはその強力な推力で2機まで運べるから、こういう運用も可能だ

杉並はベースジャバーをドラゴンの上まで飛ばした

義之はドラゴンの上まで来たのを確認して、ストライクの手をベースジャバーの取っ手から離してドラゴンの上に着地した

義之「はああああ！」

義之は雄たけびを上げながら対艦刀をドラゴンの首めがけて振り下

ろした

振り下ろした対艦刀はドラゴンの首を簡単に切り落とした
ドラゴンの翼が止まり自由落下に入る前に、義之は近くのドラゴンに飛び移り、また首を切り落とした

今度は左手に装備されてる、小型の盾に装着されてるワイヤーアンカー<パンツァーアイゼン>を上には伸ばして上に居るドラゴンの足の様な部位に噛ませた

義之「よっと！」

義之はワイヤーを巻き上げて、勢いを利用してドラゴンの上にストライクを乗せた

義之「は！」

義之は、ストライクの右肩に装備されてるビームブーメラン<マイダスメツサー>を左に投げた

左に居たドラゴンの翼の付け根を切り裂いた、ドラゴンは飛べなくなり落ちていく

マイダスメツサーはビーコンにより元の位置に戻った

義之は足元に居るドラゴンの背中にシュベルト・ゲバールを突き刺し、刺した状態から切り裂いた

ドラゴンは落ちていく、ドラゴンは近くには居ない、どうやら今ので最後だったらしい

杉並「同志桜内こっちだ！」

義之は後ろを見た、ブリッツが乗ったベースジャバーが飛んでくる杉並「同志桜内、機体をビーコンに同調させる！」

義之は反射的にコンソールに手を伸ばしパネルを操作した

ストライクは難なくベースジャバーに着地した

杉並「やれやれ、キリが無いな」

義之「ぼやくな杉並」

義之はエネルギーゲージを見た

義之「やばいな」

エネルギーゲージはもうすぐレッドゾーンに入る

通信が入りサブモニターに2人の女性の顔が映った

？「義之君！エールとランチャーストライカー持ってきたわよ！」

義之は砂浜を見た、そこには青いアストレイと赤いアストレイが居たそして2機の間にはトレーラーが2台停まっていた中に予備のエールとランチャーストライカーが収まっている

義之「更識大尉！織斑中佐！ありがとうございます！」

さらしきたてなし

更識楯無大尉は青いアストレイことブルーフレームに搭乗している女性で、ちよつと思議な頼れるお姉さん

赤いアストレイことレッドフレームに搭乗しているのが織斑千冬中佐で、織斑中佐は黒髪が腰に届くほど長く、厳しいが面倒見が良い

義之「杉並！」

杉並「うむ！」

杉並はベースジャバーを砂浜の方向に飛ばした

砂浜に着くと義之はソードストライカーをパージした

ストライクがソードストライカーを外すと色が鮮やかなトリコロールから鉄灰色に変わった、どうやらフェイズシフトがダウンしたようだ

フェイズシフト装甲は一定の電圧を通电することで無重力下で精製した合金が相転移して実弾及び実体剣に対して絶大な防御力を発揮する画期的な装甲で通电する電圧で色が変わる、ストライクの場合は赤青白の所謂トリコロールである

そして義之はランチャーストライカーを装備した

そうすると装甲がまたトリコロールに戻った

各種ストライカーパックには小型の予備バッテリーが内蔵されている、その為にストライカーパックを装着すれば戦闘可能時間が延長でき、尚且つストライクのバッテリーが切れても戦闘が可能になるのだ

ストライクのエネルギーゲージが安全域まで回復したのを確認した義之は左背中に装備されてる巨大な火砲、対艦砲<アグニ>を構えた左前方では橘菊理の搭乗したバスターが、350mmガンランチャ

1と94mm高エネルギー収束火線ライフルを直結させたビーム砲、超高インパルス長距離狙撃ライフルを構えて連射している

義之「菊理大尉！援護します！」

そういうと義之はアグニを構えて連射して、上空や遠くにいるドラゴンを撃墜していく

菊理「あれは！」

伊隅「く！<ギガンテス>か！」

ギガンテスとはタイタンの中で一番大きいサイズで最大で80メートルを超える

菊理「義之君！」

義之「はい！合わせます！」

義之は菊理の考えに気づいてギガンテスの頭に狙いを定めた

義之&菊理「いつけー！ー！」

2門の火砲が同時に放たれ、2本の火線はギガンテスの頭を貫いた
ギガンテスはゆっくりと倒れて、でかい水柱があがった

と同時にストライクの右側に10数体のタイタンが海中から現れた

義之「間に合え！」

義之はストライクをタイタン達の方角に向かせ右肩に装備されてる120mm対艦バルカンと350mmガンランチャーを撃った

義之「ギリギリ間に合った・・・」

現れたタイタンはただの肉塊に変わっていた

伊隅「各機状況を報告しろ！」

杉並「バッテリーがもう持たん・・・」

まゆき「あたしもバッテリーも無いし、ミサイルにグレネード、レールガンの弾も無い・・・」

菊理「すいません、私もです・・・」

伊隅「く！私もバッテリーが無いな・・・」

義之「俺はエールストライカーが残ってるのでまだ行けます！」
更識「あたしはまだ行けるわよ！」

千冬「私もだ！」

それを聞いた義之は1つの決断をした

義之「伊隅隊長！まゆき先輩に菊理大尉、杉並は補給に戻ってください！ここは俺達が引き受けますから！」

全員「……！？」

義之「ここは俺と更識大尉に織斑中佐で抑えます！ですから早く！」
まゆき「無理だよ弟くん！5機でようやく抑えられたんだよ！？3機だけなんて……！」

千冬「大丈夫だ、既に頼りになる援軍を要請してある」

と同時にリーダーに反応が現れた、方向は真後ろ軍事式に言うと6時の方向から高速で接近する反が2機有った

伊隅「援軍か！」

伊隅は振り返って確認した、現れた機影は黄金色のアストレイと紅いストライクだった。

義之「神宮司中佐！それに草壁大尉！」

黄金色のアストレイことゴルドフレームに搭乗しているのは神宮司まりも中佐で、厳しくも優しい頼れる人物

紅いストライクことストライク・ルージュに搭乗しているのは草壁美鈴大尉で、リーダーシップがありカリスマ性溢れる女性だ

まりも「待たせてすまん！」

美鈴「皆待たせた！」

千冬「伊隅少佐ここは我らが引き受ける！義之大尉の言う通り補給に向かえ！」

伊隅「しかし！」

千冬「いいから行け！これは上官命令だ！」

伊隅「了解しました、御武運を……！！」

伊隅みちる少佐達は引かれる思いで戦線を後にした

千冬「さて、義之大尉あれ程の事を言ったんだ、貴様の活躍見せて貰うぞ？」

義之「了解！して織斑中佐その刀は？」

義之はレッドフレームの腰に装備されてる刀を聞いた

千冬「ん？ああ、これは私が頼んで作ってもらった対艦刀ガーベラ・ストレートだ」

義之「直訳すると菊一文字ですか、かつての名刀の名前ですね」

千冬「私は刀のほうが慣れてるのでな」

義之「なるほど」

千冬「さてと、無駄話はここまでだ来るぞ！」

義之は愛機ストライクの向きを海の方角に向けた、海中から次々に現れるタイタンに、空を飛ぶ数10体のドラゴンがメインモニターに映った

まりも「織斑中佐どう対処しますか？」

千冬「私と義之大尉でドラゴンを処理する、神宮司中佐は草壁大尉と更識大尉を率いてタイタン共を」

全員「……了解！」「……」

義之「桜内義之、ストライク行きます！」

そう言うとき義之はストライクのスラスターを全開にしてドラゴンの群れに突撃した

尚この戦いは1昼夜続き、その戦闘の激しさから後に「初音島攻防戦」と呼ばれるようになり、この時の戦闘データはシュミレーターに使われパイロットの育成に大いに貢献したのである。

そしてこの戦いから約4ヶ月後の新太陽暦71年12月末世界中でタイタンの全滅を確認、タイタン戦争は多大な犠牲を払い終結したのであった。

これは、1年中桜が咲く不思議な島「初音島」での少年少女達の、交錯する思いと道標、そして戦争と言う非日常と日常が入り乱れるなかで強く逞しく生きていく物語である。

2年前の戦いsideSY（後書き）

もう1回言いますが、遅くなってしまい大変申し訳ありませんでした！（土下座慣行）言いますと書いてたのを間違って消してしまっただのが原因ですはい
さてようやく義之が登場しました、因みに沢井麻耶が恋人なのは作者の好みです！
異論は認めん！！

それぞれの始まり前編（前書き）

駄作者の第3話でござい

それぞれの始まり前編

？「はあはあはあ」

広大なグラウンドを走る1つの人影

身長は約180cm、髪は耳が見えるあたりで切っており、顔立ちはかなり丹精でイケメンと言える

青年はどうやら目標周を走り終えたのか、ゆっくりとペースを落としいき立ち止まり膝に手を置いた

？「はあはあはあはあ・・・」

青年は汗を拭きながら乱れた息を整えてから空を見上げた

空には満天の星空と三日月が見えた

？「む？そこに居るのは土見か？」

つちみりん

土見稟は後ろに振り返ると、そこに居たのは膝まで届く髪を後ろで纏めてポニーテールにしている長身の少女が居た

みつるぎ

稟「ん？ああ、御剣か」

みつるぎめい

その少女の名前は御剣冥夜と言い、凜という言葉が似合う少女だ

稟「今日は晚かったなどうした？」

たける

冥夜「・・・武にすっぱかされた」

冥夜は不機嫌そうに言った

武と言うのは冥夜と同じ207訓練部隊に所属する訓練生だ。名前は、

しろがね

は、白銀武と言う

因みに御剣冥夜と白銀武は恋人である

そして稟は206訓練部隊だ

稟「はは、それはご愁傷様」

冥夜「土見はあがりか？」

稟「ああ、ノルマはクリアしたからな」

そう言うと稟は星空を見上げて

稟「もうすぐだ」

冥夜「なにがだ土見？」

稟「ああ、総合戦闘技術演習がさ」

冥夜「ああ、そうだな」

？「む？そこに居るのは稟に冥夜か」

稟「ああ、ほし箒か」

箒とは208訓練部隊に所属している女の子で、冥夜と同じように凛と言う表現が似合う子で名前は、篠ノ之しののへ箒ほしと言う、膝辺りまで伸びてる綺麗な黒髪を後ろでリボンでポニーテールにしているのが特徴だ

稟「一夏はいちかどうした？」

一夏とは箒と同じ208訓練部隊に所属している訓練生で名前は織お斑りむらいちか一夏と言う

箒「一夏ならもうすぐ来るはずだが……」
と宿舍のほうから

？「おわーーーーー！？」

稟「この声は一夏？」

宿舍の方向を見ると、件の一夏を逆さづりの状態で見つけた？「ふっ！その程度では私の嫁になれんぞ一夏！！」

そして逆さづりの一夏の前に身長150cmくらいの銀髪が腰に届くくらいで左目に眼帯を着けた小柄な少女が居た

一夏「ラウラ！だから嫁じゃなくて婿だ！つか降ろせ！！」

どうやら、同訓練部隊のラウラ・ボーデヴィツヒが仕掛けた罠に一夏が引っかかったらしい

まあ、ラウラは元JEU軍の特殊部隊の隊長だから仕方ないかもしれないが

稟「ラウラが来てもう3ヶ月か、だいぶ馴染めたみたいだな」

箒「ああ、最初は緊迫した雰囲気だったがな、今では大切な仲間であり友だ」

冥夜「しかし、最初来た時は驚いた、なぜ現役の隊長が来たのかとな」

稟「ユーラシア連合がJEUを攻め落としたんだっただな……」

「JEUとは、日本帝国とEUの軍事同盟の名前である

？」「ちよつと！？一夏の悲鳴が聞こえたけどって、一夏！？」

一夏「シャルか！？助けてくれ！！」

見ると逆さづりの一夏とラウラの近くに金髪をショートカットで纏めた、エメラルドの瞳に中性的な顔立ちの美少年とも言える美少女が居る、名前はシャルロット・デュノアと言う

シャル「ちよつと、ラウラ一夏を降ろしてあげて！」

どどん騒がしくなってきた

稟「やれやれ、助けてやりますか？」

稟は両隣に居る人物に聞いた

冥夜「うむ」

第「そうだな」

稟の言葉に冥夜と第は苦笑いしながら従い、騒いでいる一夏達の方
向へと走った

稟sideEND

???side

ここは軍施設の地下にある、とある人物の執務室だ

その部屋には一通りの応接セットと木製のそれなりに大きい机があった

しかし、木製の机の上には書類が山の様に積まれていて処理済よりも処理待ちのほうに圧倒的に多い

そしてその机に一人の男が突っ伏していた

と書類の間にあった電話が鳴った

男はうつ伏せのまま受話器を取って

？「はい、どうした麻耶？」

どうやら相手は専属秘書であり恋人の沢井麻耶らしい

麻耶「義之、伊隅中佐と高坂中佐が来たわよ」

義之はそれを聞くと体を起こし、片手で髪を軽く整えながら義之「通してくれ」

と言い受話器を戻したら空気が抜ける様な音がしながらドアが開くと、そこには2人の女性が立っていた

伊隅&まゆき「失礼します！伊隅みちる及び高坂まゆき両中佐出頭しました！」

と2人はドア付近で敬礼しながら言つて、部屋に入ってきた

義之「はい、ご苦勞様です、と言つか敬礼はしないでいいって言いましたよね？」

伊隅「やはり軍人としては当然ですから」

まゆき「そういうことだよ弟くん」

と言いながら二人は応接セットの近くまで歩く

義之も二人とは反対側のソファに座つてから、二人にも座るように促した

義之「で今年はどうか？」

伊隅「今年は大漁ですよ、大佐」

まゆき「選別に手間取っちゃったよー」

と言いながら二人は脇に挟んでいたファイルを取り机に置いてから開いた

そこには30名ばかりの顔写真とプロフィールと成績が書かれた書類があつた

伊隅「それでは我々が選んだ候補です」

まゆき「じゃあ名前を言うね、まずは206訓練部隊隊長の、涼宮すすみや
あかね茜、次に同部隊副長の」

伊隅「そして最後に210訓練部隊のライラ・フリードリヒで以上です」

義之は机の上に広げられた書類を1枚ずつ見ながら

義之「ふむ、今年は本当に大漁だな」

まゆき「まあ、210は元JEUの特殊部隊だから当たり前だけどね」

伊隅「そして、神宮司及び織斑両教官の推薦人物も高い成績を保持しています」

義之「どれどれ?・・・なるほど高いな」

まゆき「207の各員は各分野に別れて高いけど、とくに白銀訓練生がずば抜けて高いね」

伊隅「208はコンビネーションがずば抜けてますね」

義之「ふむ、流石は2大教官が育てただけあって、他の訓練生よりは高い成績だな、ん?」

伊隅「どうしました?大佐」

義之「この御剣ってあの?」

まゆき「そ、あの御剣財閥の子だよ、しかも直系の、備考見てみなよ」

義之「あの御剣財閥の令嬢がなんで居るのか知らないけど、まあ優秀ならば選ぶさ」

伊隅「たしかに、そうですね今我々には早急に戦力が必要ですからまゆき」で、意外なのが、神崎教官長が推薦を出してるのよ」

義之「え?あの神崎教官長が?」

神崎とは本名神崎恭一郎かんざききょういちろうと言い、昔は傭兵として世界中の戦場を渡り歩いた豪傑で、歳は40後半で髪型はオールバック、ヒゲを生やしていて常にサングラスをかけている見た目は所謂ダンディーなオッサンなのだが、性格に難が有るそれは、「他人ひとの不幸ほど楽しい事はないね!」と笑って言う人物で、彼を良く知るK氏は度々こう

言う「いっぺん殴りたい」と

閑話休題

伊隅「それがこの訓練生です」

義之「206の土見訓練生か、……あれ？」

まゆき「どうしたの？ 弟くん？」

義之「なーんか見覚えがあるなーと、どこだったかな？」

伊隅「？、そうですか、しかしこの訓練生平均して成績はA判定です
ね」

義之「ほんじゃま、俺達で試しますか？」

伊隅「試すって、格闘技能ですか？」

義之「決まってるでしょ？ 俺達に最も必要な技能だよ」

義之はそう言いながら口端をあげた。

それぞれの始まり前編（後書き）

まず先に、遅れてしまい申し訳ありませんでした!! or s
ちよつとP Cの調子が悪くてなかなか上げられませんでした!!
次回も少し遅れるかと思います、会社の書類がヤバイ・・・
だけど挫けません!!

皆さん何かアドバイスなどがありましたら教えてください!!

それぞれの始まり後編（前書き）

懐が寒いです、出費が痛いぜ！

理由は自転車が誰かにパンクさせまくられてるからです！

既に2回チューブを交換しましたよ・・・

犯人見つけたら、無事で済むと思うなよ！！（怒）

それぞれの始まり後編

? side

?「はあはあはあ・・・く!」

狭いコクピットの中1人の少女が悪態を吐くのを堪えながら操縦桿を握っている

目の前のモニターには6眼の醜い巨人達の死骸が横たわっている

?「何体倒せば終わるのよ!」

そう少女が叫んだ瞬間だった

?「え!?なに!?!」

コクピット内に警告音の大合唱が鳴り響いた

?「どこから!?!」

と目の前にあつた死骸の山が突如膨れて吹き飛び、その下から手負いの巨人が手に大剣を持って現れた

?「しまった!仕留め損ねてた!」

突然のことに少女の反応は遅れたが

?「く!このーーーー!!」

少女は機体の右手に保持していたビームサーベルで反撃しようと振り回したが

突然目の前に居た巨人の振り下ろしていた大剣がピタリと止まり、

モニターと室内灯が消えてコクピット内が赤くなり、モニターには、致命的損傷により戦闘不能・・・シュミレーター終了の文字が映った

?「だー!もう!また負けた!」

少女はヘルメットごと頭を抱えて叫びながら、シュミレーターから出た

少女は出るとヘルメットを脱いだ、その途端に腰より少し長い位まで伸ばしてあるツインテールが現れて、その少女のトレードマークでもある髪留めの鈴が鳴った

?「うーん、あれは反撃じゃなくて回避するべきだったかな?」

と呟くと空気が抜ける様な音が聞こえて

？「あー！こんなところにおった、もーアスナ！！」

とアスナと呼ばれた少女、本名、神楽坂明日菜は声のした方向に振り向くとそこには2人の少女が居た

明日菜「あれー？木乃香に、刹那さんじゃんどうしたの？」

こちらに駆け寄ってくる人物のは1人は髪は黒く腰位まで伸びていて、ほんわか雰囲気の大和撫子と呼べる少女で名前は、近衛木乃香と言う

もう1人は右肩に担ぐ様に竹刀袋を持った少女で前髪は右側だけあり後ろの髪は左側に纏めた少女で、木乃香とは違った印象の凛とした大和撫子と言える少女と言える、名前は、桜咲刹那と言う

刹那「どうしたの？ではありませんよ明日菜さん」

木乃香「ネギくんが捜しとったで」

明日菜「ネギが？なんで？」

因みにネギとは彼女達の教官の1人の本名ネギ・スプリングフィールドのことである、詳細はまた別の機会に記す

刹那「明日菜さんだけ、今日の模擬戦のレポート出してないんですよ」

明日菜「ヤッバ！忘れてた！！今何時！？」

木乃香「もうすぐ7時だよ」

明日菜「急いで戻らないと！ご飯も食べられないじゃん！？」

食欲が先にでる辺りは、やはり花の10代乙女だからか・・・

先にレポート書いてやれよ・・・、ネギ君泣くぞ？（作者）

刹那「だから呼びに来たんですよ、急いでください！」

明日菜「ちよつと待って！今シュミレーターの電源をスタンバイモードに切り替えるから！」

そう言つて明日菜はシュミレーターのコンソール画面のキーボードを叩いてシュミレーターの電源をスタンバイモードに切り替えた
木乃香「ほら！アスナ急がんと間に合わへんよ！」

刹那「書類書くのも手伝いますから急いでください！」

明日菜「ありがとう刹那さん！」

いいのかなそれ・・・（作者）

明日菜「ん？」

木乃香「どしたんアスナ？」

明日菜「今誰かにツッコミされたような・・・？」

刹那「いいから行きますよ！急いでください！！」

明日菜「ああ！そうだった！！」

そう言つて3人はドアを開けてシュミレータールームを出た

明日菜「うーん」

明日菜は走りながら、唸^{うな}っていた

刹那「どうしました、明日菜さん？」

明日菜「いやー、やっぱりちゃんとMSに精通した教官が居ないと
厳しいなーって」

刹那「そうですね、いくらネギ先生でもMSは無理みたいです」

明日菜「うーん誰か良い教官居ないかな？」

3人はそう言いながら走っていく

そして食堂でご飯を食べた明日菜は木乃香と刹那の手助けを借りて
3時間かけてレポートを書き上げた

？「はい、確かに受け取りました」

明日菜「良かったー、間に合ったよー、ごめんねネギ？」

そう言つと明日菜は目の前の椅子に座っている10歳くらいの小さい
眼鏡をかけスーツを着た少年に謝つた、その少年が明日菜達の教官
の1人である、ネギ・スプリングフィールドだ

ネギ「いえいえ、だけど明日菜さん」

明日菜「な、なに？」

ネギ「シュミレーターをやるのは構いませんが、ちゃんと僕には話
を通してくださいね？」

明日菜はどうやら誰にも言わないでシュミレーター訓練をしていた
ようだ

明日菜「ごめーん！、で話は変わるけどさネギ？」

ネギ「はい、なんですか、明日菜さん？」

明日菜「MSの訓練なんだけど、やっぱり教官が必要だと思っの」

ネギ「はい、僕もそう思いました、先ほど本部の月詠さんつくよみと話合
ったんですよ」

明日菜「え？月詠さんと？」

ネギ「はい、そうしたら手配してくれると言ってくれました、ついでにMSもどうにかすると」

明日菜「本当に！？やった！私のリーオーもうボロボロだったから助かるわ！」

明日菜達のMSは前大戦終結後に各戦場跡から回収したジャンク機体をレストア《再生》した機体の為に安定稼働できず尚且つ機種もバラバラなのだ、最低でも中古機体でも機種を統一したいところだ尚、明日菜が搭乗しているリーオーは前大戦時にN・A・U《ネオアメリカ連邦》が開発した機体で操縦性は高い機体で、今尚、N・A・Uでは改修した機体のリーオーMk？《リーオーマークツー》が運用されている

ネギ「それで、僕が選んだ場所はこの人に頼もうかと打診しました」

そう言つてネギが1枚の写真を出した、そこには桜色染まったの三日月型の島が写っていた

明日菜「ここって初音島？」

ネギ「はい！ここは世界で初めてMSを作り投入した国ですから、優秀な教官が軍人さんが居るはずですよ！」

明日菜「私の印象に残ってるのはストライクかな？」

ネギ「初音島の英雄の守護神さんですね？なんでも明日菜さん達と年齢はそう変わらないみたいですよ？」

明日菜「ええ！？それ本当なの！？」

ネギ「はい、1度会ってみたいですよー」

ネギが眼を輝かせながら喋ったのを見た明日菜は微笑みながら

明日菜「もしかしたら会えるかもね？」

そう言って教官室を退出した……

明日菜 side END

??? side

?「いつてきまーす」

そう言いながら私は玄関のドアを閉めた

朝7時45分、空は快晴

私の名前は、八重 桜風見総合学園普通科高等部2年C組に通っています
やえさくら

ここ初音島に来て約2年、最初は1年中桜が咲いていることに驚いてましたが慣れました

私が住んでるのは複数あるメガフロート島《人工島》の1つの通称<居住島>にある光陽町です、と言ってもこの光陽町は2番目の光陽町で、本物の光陽町は2年前の<タイタン戦争>で滅んでしまいました、その後で初音島の大統領さんが私達、光陽町の住民を受け入れて引越しました、初音島の大統領さんの名前は、芳野さくら《よしのさくら》さんと言います、見た目は10代くらいなんですけど、幾つもの博士号を持つ優しい人で、優しい金色の髪をサイドアップテールにしている碧眼が特徴の人物で、なんと私の通う風見総合学園の学園長でもあります。

?「ああ、八重おはよう!」

桜「おはよう、美夏ちゃん!」

私に挨拶してきたのはクラスメイトの、天枷美夏ちゃんです。
あまかせみなつ

いつも牛柄の帽子をかぶっているのが特徴で、今は風紀委員長をやっている、気が強いですけど素直で優しい、いい子です

美夏「一緒に学校に行こう」

桜「はい」

そう言って私達は、モノレールの駅に向かって歩きだしました、私達は他愛無い会話をしながら駅に着いて、モノレールに乗り3駅乗ったら駅から降りて、次は電動無人バスに乗って15分後に目的地に着いたので降りるとバス停の目の前にあるのが風見総合学園です、なんと全生徒数が、初等部、中等部、高等部、大学部合わせて合計1万人超えという超マンモス学校です

私達は門の所に居る守衛さんに挨拶して、下駄箱で上履きに履き替えながら

桜「そういえば、美夏ちゃんと由夢ちゃんは桜武おつぐに所属してるんだよね？」

美夏「ああ、詳しい所属は機密だから言えんが、美夏はMSパイロットで由夢は衛生班だな」

ちなみに由夢ちゃんとは、クラスメイトの朝倉由夢ちゃんあさくら ゆめちゃんのことで髪型はショートカットで頭の両側でお団子、所謂シニヨンが2つある子でクラスでも保健委員に所属しています

そして教室の前に着いて私が教室のドアを開けようと手を出そうとしたら

美夏「待て八重！」

美夏ちゃんが私の腕を掴みました

桜「？」

私が振り向くと、美夏ちゃんがジェスチャーでドアから離れるというので、離れたら美夏ちゃんがドアに近づいて

美夏「すーはーはーはー」

と深く深呼吸してからドアを一気に開けました、その瞬間？「おはよう！桜ちゃん！ようこそ俺様の」

美夏「ふん！！」

と美夏ちゃんは教室の中から飛び出してきた眼鏡をかけた男子に対して見事に腰の入った右パンチ、所謂右ストレートを放ちました？「ぐふ！！」

美夏ちゃんの右ストレートは教室から飛び出してきた眼鏡をかけた男子、緑葉 樹君みどりはいづきの腹部に凄い音と共に直撃しました

美夏「相変わらず懲りないな緑葉、それならば・・・麻弓!!」
と美夏ちゃんが教室の中に向けて呼ぶと

？「委細合点承知なのですよー!」

と教室内から聞こえたので教室を覗くと、そこには右目が赤で、左目が青のオッドアイが特徴の子が居ました、その子が本名、麻弓!!
タイム《まゆみ!!たいむ》ちゃんです

そして麻弓ちゃんは何処からか縄を取り出して

美夏「ふん!」

樹「げふ!」

美夏ちゃんは緑葉君を蹴り上げて

美夏「は!!」

樹「ごは!」

更に、麻弓ちゃんに向けて蹴り飛ばすと

麻弓「麻弓ちゃん流縄縛術!第27弾!!」
まゆみちゃんりゅうじょうばくじゅつ

と叫ぶと緑葉君が一瞬にして縄でぐるぐる巻きになりました

樹「新しい世界が見える!!」

そのまま縛った状態で吊るすと

麻弓「エリカちゃん!!」

と後ろ、要するに窓の方向を向き叫ぶと、窓際にスタイルの良い腰位まで伸びた金髪と碧眼が特徴の子が居ました

この子の名前はエリカ・ムラサキちゃんと言い、なんでも東欧生まれのお姫様なんだと聞きました

エリカ「準備OKですわ!!」

といつの間にか窓が全開になっていて

麻弓「美夏ちゃん!」

と麻弓ちゃんが呼ぶと

美夏「うむ!」

と2人同時に飛び上がると

クラスメイト一同「「「「「麻弓に美夏！ぶちかませ！！！！」」」」

とクラスの皆（私に麻弓ちゃん、美夏ちゃんとエリカちゃんを除く）が叫ぶと

美夏＆麻弓「必殺！ライジング・インパクト！！」

2人で緑葉君を窓の方向に蹴りました

樹「ごふあー！！」

という声を残して緑葉君が窓の外に蹴り飛ばされたら

エリカ「ゴミ掃除完了ですわ！」

と言いながら窓をピシヤリと閉めました（外では緑葉君が下に消えました）

桜「流石にやりすぎなんじゃ……」

と私が苦笑いしながら言う

美夏「何を言う八重！」

麻弓「あれくらいやらないと緑葉君は止まらないですよ！！」

エリカ「その通りですわ！！」

と3人が力説しました

桜「あははは……」

私は苦笑いしながら自分の席に座ると

麻弓「そういえば、さっちゃんこのクラスに転校生が来るらしいのですよ、しかも3人も！」

桜「ふーん、転校生ですか……」

私はその麻弓ちゃんの言葉を聴き、窓の外を見ると

桜（稟くん、稟くんは今何処に居るんですか……？）

1年以上音沙汰もなく、会っていない幼馴染であり、想い人である人物を思いました

桜sideEND

それぞれの始まり後編（後書き）

皆様駄作者による続編です

悲しい事に未だにコメント数0です！

誰でも構いませんから、何卒^{なにしろ}コメントや指摘、レクチャー等々あり
ましたらお願いします！！（土下座敢行中）

おまけ1VIP大騒動（前書き）

とりあえず思いついたので書きました

おまけ1VIP大騒動

? side

? 「なんでこうなった……」

俺、桜内義之は現在起きている現象に情けない声しか出せずに居た

? 「誰にもこんなこと予想できないわよ、義之……」

そう言ってくれたのは隣に居る俺の副官であり恋人である、沢井麻耶である

義之は目の前に居る人たちを見る

? 「おいこら！ さくらんぼ！ なにがどうやったらこうなる!？」

叫んでいる人物は見た目は自分と同じ年くらいの青年だが着ている服は軍服で襟についてる階級証は大総統を示している

? 「うにゃー、そう言われたって……」

そう言ってるのは金髪ツインテールで碧眼が特徴で見た目はあいかわらず10代前半の人物にしか見えない芳野さくらだ

? 「そうよ、さくらちゃん！ なんで皆若返ってるのよ!!」

そうさくらに詰め寄ってる人物は見た目は、由夢に似ているが首に猫がつけるような鈴が着いている、見た目は同年代の女性だ

義之「まあまあ、落ち着いてくださいよ、純一さんに、音夢さん」

そつ目の前に居る俺と見た目同年代の人物は、音姉こと、朝倉音姫と朝倉由夢の祖父と祖母にあたる人物である、朝倉純一さんとその奥さんである、朝倉音夢なのだ

義之「はあ……」

俺はため息を吐きながらこうなった理由を思い出してみた

回想今から数十分前

始まりは今日の仕事が終わりましたまたま帰りが純一さんと同じになったところからだ

純一「なんだ、義之か」

義之「おや純一さん、仕事ちゃんと終わらせましたか？」

純一「お前ワシをなんだと思っている？」

義之「かつたるいが口癖の我らが上官です」

純一「かつたるい・・・」

言ったそばから言ったよこの人・・・

義之がそう呆れていると

麻耶「義之、車が用意できたわよ、って純一大総統閣下！」

と麻耶は慌てて純一さんに敬礼した

純一「だから、敬礼はいらないと言っただろ・・・」

純一さんは呆れながら言った、そうこの人物はかつたるいからと儀式や祭典以外はあまり敬礼や敬語をさせないのである

義之「純一さんも車に乗りますか？」

純一「おう！ありがとうよ」

そう純一さんが微笑みながら言う

そうして俺達は車に乗った

純一「そうだ、さくらの所に寄ってくれるか？」

義之「わかりました」

麻耶は無人電気車の行き先を変更した

そうして到着したのは天枷研究所だ、ここにさくらさん専用の研究スペースがあるのだ

義之たちは守衛に挨拶して、受付係りにさくらさんの居所を聞いて確認して廊下を進んだ

そうしてしばらく進むとドアにく芳野さくら研究室>と書かれたプレートが見えた

純一「ここだな、さくら、入るぞ？」

と言いながら純一さんはドアを開けた、その瞬間さくら「うにゃー!?今はダメー!!!!!!」

とさくらさんが叫ぶ声が聞こえた途端だった

カッ！！ともの凄い光が溢れ

麻耶「眩しい！」

義之「麻耶！」

俺は反射的に麻耶を庇った瞬間

ボン！！と爆発がした

義之「ゲホ！一体なにが？」

と俺は研究室のほうを見た

さくら「ケホケホ・・・、みんな大丈夫？」

義之「俺と麻耶は大丈夫です！」

俺は腕の中で真っ赤になって固まっている麻耶の無事を確認してから言った

義之「純一さん！大丈夫ですか！？」

さくら「お兄ちゃん、大丈夫？！」

と先ほどまで純一さんが居た場所を見る、最初は煙で全然見えなかったけど少しすると晴れて、そこに居たのは・・・

？「げほげほ・・・義之お前俺じゃなくて恋人を守ったな？」

義之「・・・え？」

麻耶「・・・はい？」

自分と同じ年くらいの青年だった

義之「えっと・・・どなた？」

とりあえず俺は聞いてみた

？「え、誰って俺は朝倉純一だが・・・ってなんだこれ？」

目の前に居る青年は自分の体をみて驚いている

さくら「けほけほ・・・えらい目に・・・ってお兄ちゃん！？」

さくらさんは目の前に居る青年を見て驚いたように言った

麻耶「お兄ちゃんって・・・ええ！？まさか純一大総統閣下！？」

義之「なに！？」

流石の俺でも驚いた、だって目の前に居るのはどう見ても同い年しか見えないからだ、とその時だった

？「ミステリー……だ……！！！」

と叫びながら天井の通風孔から1人の若い男性が逆さづりで現れた
純「杉並！？お前どこから現れてるんだよ！？」

杉並だと！？そう言われると確かに杉並に見えるが、少し違和感が
……

麻耶「ねえあの人って情報省の代表の杉並中将じゃ？」

義之「ああ、あの飄々としてて掴みどころがない爺さんの……
え？」

そう言われると確かにあの服は情報省を現している襟が黄色だ（軍
は黒）

としているうちに旧杉並が通風孔から綺麗に着地して

旧杉並「ふ、ミステリー有る所に、この俺アリだ！！」

ああ、杉並は何処まで行っても杉並だと納得してしまう言葉だ、と
次に

後ろのドアが開いた

？「朝倉君！これはどうなってるんですか！？」

と現れたのは赤い髪が膝くらいまで伸びている若い女性

純「ことりまでか！？」

ことりだと？まさか……

麻耶「ことりって、あの白河プロモーションの白河ことり社長！？」

やっぱりね……、と俺が半ば思考停止しかけた時

？「朝倉！これはどういうことだ！？」

と現れたのは和服を着た髪がショートカットの和式美人だった

ことり「叶^{かなえ}ちゃん！？」

叶だと？

麻耶「今度は内務省の工藤^{くどう}叶^{かなえ}大臣！？」

もうどうにでもなれ……と思つたら

？「朝倉！これはどういう事よ！」

とショートカットの勝気な女性と

？「朝倉君！どうなってるんですかー？」

とちよつとオツトリした女性が現れた

純一「眞子に萌先輩!？」

今度は誰よ

麻耶「水越総合病院の水越萌院長に水越眞子副院長まで……」

VIPばつかな……

?「朝倉様!これは一体!？」

と今度は巫女服の女性が来た!?

純一「環!？」

その名前は確か……

麻耶「今度は、湖ノ宮神社の代表さんまで……」

若干一般人寄りだな……(かなり失礼)

?「朝倉さん!なんなんですかこれは!？」

?「なんで若返ってるんですか!？」

と清楚な服を着た頭にリボンを着けた女性とメイド服を着た女性が

さくら「うにや!？美咲ちゃんに、明日美ちゃんまで!？」

その2人は確か……

麻耶「鷺沢輸送会社の会長にその侍従長さんまで……」

と次に

?「朝倉先輩!何が起きたんですか!？」

と犬を連装する元気な人物が

純一「うお!？わんこ!？」

わんこ?

さくら「うにや!？美春ちゃん!？」

その名前は……

麻耶「天枷研究所の副所長まで……」

ここの副所長かよ……

?「あわわわ!？朝倉君なんなんですかこれは!？」

と眼鏡をかけた、ちよつと落ち着きのない女性

純一「うをう!？ななこか!？」

ななこつてたしか……

麻耶「初音島最大の雑誌社の桜花講談社の社長さん!？」

あー、あの元作者さんか

「先輩……！？」

と今度は小柄な人形みたいにかわいい人が

純一「アリスか!？」

もう驚かないよ……

麻耶「月城財閥の代表さん……かわいい（ボソリ）」

ん？麻耶？今なんて言いました？

そして、最後に

「兄さん！どうなってるんですか！？」

と現れた人物を見て俺は

義之「え！？由夢！？……じゃない？」

見た目は由夢に似ているが、お団子頭じゃないし何より首に鈴すずが着いてる

純一「音夢！？」

さくら「音夢ちゃん!？」

なんです？

麻耶「国境なき医師団代表の、あさくらねむ朝倉音夢さん!？」

どうやって来たんだ？

純一「お前確かパキスタンに行ってたんじゃない？」

音夢「仲間に頼んでジェット機で送ってもらったんです！」

ああ、脇に抱えてるパラシュートがそうか

麻耶「なんで全員若返ってるの……？」

そんなの俺が1番知りたいよ

で始まりにいたるわけで

さくら「うにゃー、とりあえずここじゃなんだし家に行くつか？」

とさくらさんが言ったので

芳野家に全員集合したら

義之「流石に狭いな」

いくら広い芳野家とはいえ、10数人は狭い

純一「で、なんでこうなったのか説明しろ、さくら」

さくら「うん・・・、それはね僕が作った魔法薬が原因なんだ・・・」

全員「・・・魔法薬?」「・・・」

なんじゃそりゃ?

さくら「簡単に説明すると魔法の力を強める薬なんだ」

音夢「なるほど・・・」

さくら「で、あの時僕は昔を思い出してて、懐かしいって思ってたから、多分だけど魔法の桜が願いを叶えて」

純一「それを、その魔法薬が強くしたってことか?」

さくら「うん・・・」

うーむ、これぞ

旧杉並「摩訶不思議だな」
まかふしぎ

音夢「で、何時戻るの?」

確かに気になるなそれは

さくら「うにゃー、それがね・・・わからないんだ」

全員「・・・なにーーーーー!?」「・・・」

鼓膜が破ける!

さくら「だって、こうなるなんて予想してなかったんだよー!」

まあ出来てたら凄いな

麻耶「では、どうするんですか?」

さくら「とりあえず、戻るようにはしてみるけど、今日は皆家に

泊まってるね?」

純一「ま、仕方ないな」

音夢「こんな姿じゃ戻れないしね」

全員「・・・お世話になります!」「・・・」

さくら「それじゃあ、ご飯にしようか」

そう、さくらさんが言ったので

義之「そんじゃま」

麻耶「私達が作ってきますから、待っていてください」

全員「「「「「はーい」「」「」

仲が良いな

で2人で作って

全員「「「「「いただきます」「」「」

ご飯を食べて

順繰りに風呂に入って

部屋に布団を敷き

全員「「「「「おやすみなさい」「」「」

寝たので

義之「今日は疲れた・・・」

麻耶「そうね・・・」

俺達も寝ました

翌日

義之「皆さん起きてくださ・・・」

俺は驚いた、だって

麻耶「元に戻ってる・・・」

そう全員もとの姿に戻ってるんだよ

さくら「どうやら、一過性だったみたいだね、良かったー」
ってことで

全員元の職場や家に戻りました

E
N
D

おまけ1VIP大騒動（後書き）

つてことで、思いつきで書きました、因みに紫和泉子と霧生香澄は都合により出せませんでした。

2人のファンの方は申し訳ありません！（土下座敢行）
だって幽霊と星に帰った宇宙人なんてどないせーと！？
ではここからは

あとがきコーナーダゼ！

作者「はい、始めました、あとがきコーナーです、司会は俺、作者の京勇樹と」

雪音「田原雪音でお送りいたします」

作者「このコーナーは皆さんからお送りいただいた、要望に答えます！」

雪音「まだ1通も着てないけどね」

作者「ぐは！？それは言わないで！悲しいから！？」

雪音「では本日のゲストはこの方！」

さくら「どうもー」芳野さくらです！

作者「なんか無視されたけど、ではさくらさん、これを読んでください」

さくら「うにゃ？これを言うの？」

雪音「はい、お願いします」

さくら「わかった」ではではー

と深呼吸するさくらさん

さくら「全力！全壊！（誤字では無い）デイベイン・。スター！！」

カッ！

作者「マジで！？」

背後にあった壁に穴が開いた！？

雪音「本当になにか出たわね・・・」

さくら「にやはーやりすぎちゃった」

作者「まあ、次回までに直せばいいや」

雪音「直るのこれ？」

多分

作者「では、本日はここまで」

さくら「みなさん、また次回まで」

雪音「さよーならー」

要望がある方は言わせたいセリフ（番組名や本の名前も書いて）、
言わせたいキャラ名を書いてください
感想も待ってます！！

運命の分岐点 *side* 軍 (前書き)

なんとか早く書き上げました
さてここから話はどくなるのか

運命の分岐点 side 軍

ここはある軍施設の地下にある会議室

義之「さて推薦された人物についてだが」

と義之が発言した時

書類が詰まれた机の上に備え付けられた電話が鳴った

麻耶「義之外線よ？しかも直通」

麻耶が電話の光つてる部分を見て言った

義之「直接とは珍しいな」

軍施設では外部の電話は一度オペレーターに繋がり、そこから各部署の各人に繋がる仕組みになっている

しかも、今義之達が居る施設は特殊部隊専用の施設のため、なおさらセキュリティは高い

従ってこの軍施設に直接外部から電話をかけられるのは僅か一握りしか居ない

義之は受話器を取り耳に当てた

義之「はい、桜内さくらいです、……………あ、さくらさんですか」

さくらとは本名、芳野よしのさくらといい年齢不詳の金髪ツインテール、碧眼が特徴の義之の保護者で、現在は初音島の大統領だ

義之「はい、確かに居ますね、……………え！？ちよつとどういうことですか！？」

義之は成績とプロフィールが書かれた書類を見てから驚いた声を上げた

室内に居る人達、ワルキューレ隊の隊員は全員頭上に？マークが出ている

義之「はい……………はい、これから直接そちらに向かいます、はいでは」

と義之が受話器を戻したら
？「弟くんどうしたの？」

と聞いてきたのは腰まで伸びた髪を後頭部のあたりで大きなリボンで纏めた女性だ、名前は朝倉音姫あさぐいおとめと言い、なんで弟くんと呼ぶのかと言うと、昔一時期さくらが忙しかった時期に朝倉家に預けられていた為に、音姫やその妹の由夢ゆめと兄妹同然で育ったからだ、因みに由夢は兄さんと呼ぶ

因みに高坂まゆきの義之の呼称の仕方は音姫の影響である

義之「いや、それがさ、音姉おとねえよく要領がわからないから、今からさくらさんの所に行つて来る」

義之はそう言いながらハンガーフックに引っ掛けておいた仕官服を羽織ると

義之「麻耶、悪いけど一緒に来てくれ、それと会議は中止で朝倉大佐に伊隅中佐、高坂中佐はその書類の処理を頼みます」

音姫「わかつたよ、お姉ちゃんにお任せ！」

と音姫は胸を張りながら言い

伊隅「は！お任せください」

とみちるは敬礼しながら言い

まゆき「任せてよ弟くん」

まゆきは右手の親指を立てながら言った

そして3人以外の隊員は解散して通常シフトに戻った

空気が抜けるような音がしてドアが開き義之と麻耶は廊下に出て歩き出した

麻耶「それにしても、さくらさんから直接電話なんて珍しいわね？で用件はなんだったの？」

義之「いや、それがさ、ほれ候補の訓練生に土見稟つみりょうって居たる？」

麻耶「ええ、居たわね、その訓練生がどうしたの？」

義之「それがさ、採用しても実戦部隊には入れるなって」

麻耶「え！？なんで！？」

義之「そんなの俺が知りたいよ、それにさくらさんもなんか困ってた様な言い方だったし」

麻耶「困ってた？」

2人は長い廊下を歩きエレベーターに乗った

義之「ああ、だから今からさくらさんの所に向かうのさ」

麻耶「なるほどね」

エレベーターが止まりドアが開いたので2人は降りて、玄関の自動ドアを超えると

？「御2人とも車は回しておきました」

そう敬礼しながら言ってきたのは、眼鏡をかけていかにも出来ませ的な雰囲気的女性だった

義之「ありがとうございます、のほとけ布仏のほとけ技術大尉」

その女性の名前は、布仏虚のほとけと言いつルキューレ隊の整備班の副主任をしている、因みに主任は麻耶だ

虚「行き先は既に入力済みですから、後は自動操縦で行きますよ」

麻耶「ありがとうございます、本当なら私の仕事なんですけど」

麻耶は申し訳無さそうに言った

虚「いえ、好きでやってることですから」

虚さんは微笑みながら言う

虚「では、お氣をつけて！」

と敬礼で見送った

麻耶と義之は軍用電気自動車に乗って出発した

義之「あの戦いからもう2年か、大分復興したな」

義之は窓の外を見ながら言った、あの戦いとはくタイタン戦争のことだ

麻耶「ええ、そうね」

麻耶もそれに同意した

そして車は橋を渡り始めた

初音島は三日月型の島の周囲に9個の、メガフロート巨大人工島を浮かべている、

義之達が居たのは1番端の9番島で通称く軍艦島と呼ばれている

島で、名前で分かるところが軍事関係の施設が集中している

そして橋を渡ると義之達の視界に閑静な住宅街が入った

麻耶「だいぶ、神族や魔族の人たちが増えてきたわね」

麻耶は窓の外を見ながらそう言った

義之「ああ、確かにそうだな」

義之も窓の外を見ながらそう返事をした

窓の外住宅街を色んな人達が歩いている、だがしかしその人達の中に耳が長い人達がちらほら居るのが見えた

麻耶「<開門事件>からもう10年たつのね……」

義之「ああ、そうだね」

<開門事件>とは、今から10年前に太平洋上に存在していたとある島の遺跡に突如巨大な門が出現して、門から神族と魔族と呼ばれる人達が現れ、更に神界と魔界が存在して、その2つの世界に繋がった事件だ

しかも、その事件により今まで絵空事だと言われていた魔法の存在が実証されたのである

義之「（ボソリ）まあ、俺達は大して驚かないけどな……」

なぜ義之達は魔法に驚かないのかは後で記す

そして車はまた橋を渡った

麻耶「もうすぐ<本島>ね」

義之「ああ」

初音島の<本島>とは三日月型の島をさす

周囲に2重に展開しているメガフロートは外側に軍関係と湾口が集中して

内側のメガフロートには民間用が集中している

そして中央にある本島には初音島の政府関係と統合軍司令部、更に天枷研究所が存在している

その本島にさくらの居る大統領執務室のある施設がある

義之「純一^{じゅんいち}さんはちゃんと仕事してるだろうな？」

義之は普段から「かつたるい」が口癖の自分の上官を思い出した

麻耶「大丈夫よ、やよいさんがついている筈だから」

やよいとは本名、伊隅やよい《いすみやよい》と言い伊隅みちるの姉だ

義之「まあ、やよいさんが居るなら平気かな・・・」

そうこうしている間に目的地に到着したようで、車のドアが開いた義之「さてと入りますか」

と義之は呟き建物に入った

受付嬢「本日はどういったご用件ですか？」

受付カウンターに座っていた女性が聞いてきた

義之「統合軍特務隊桜内義之大佐と秘書官の沢井麻耶少佐です、芳野さくら大統領に呼ばれたので来ました」

受付嬢「はい、かしこまりました、確認しますので少々お待ちください」

そう言つて受付嬢は受話器を取つて電話をかけ始めたので、少し待つと

受付嬢「はい、確認しました、そちらのエレベーターへどうぞ」

と受付嬢は右手にあるエレベーターを示した

義之「ありがとう」

と言つて義之が受付から離れると後ろから

「ねえ、今のつてあの英雄よね？」とか「間違いないわよ、あの守護神よ！」やら聞こえる

麻耶「相変わらずの人気者ね義之？」

と麻耶がからかう様に言つた

義之「英雄なんてガラじゃないんだけどなー」

と義之はため息をついた

エレベーターに乗り地下8階のスイッチを押す

エレベーターがゆっくりと地下に下りていく

そして地下8階についてドアが開くと、目の前を自身より高く書類を持つてフラフラ歩いてる小柄な銀髪の女性が居た

義之「よつと、大丈夫かアイシア？」

？「え！？あ、ありがとう義之くん！」

そう言つたのは見た目10代の銀髪赤目の小柄な女性だ、名前はアイシアと言つ、因みにさくらと同様年齢不詳である、だが少なくとも

も純一やさくら、音夢と同一年くらいの筈だが・・・若い

義之「さくらさんの補佐ありがとうな」

アイシア「ううん、これくらいやらないと、だって私副大統領だもん！」

そうなんとアイシアは副大統領なのだ

義之「そうだったな」

アイシア「そういえば、義之くんはどうしてここに？」

義之「さくらさんに呼ばれてきたんだよ」

アイシア「さくらに？」

義之「ああ、さくらさんはいつもの部屋か？」

アイシア「うん、そうだよ」

義之「じゃあついでに運ぶか」

麻耶「そうね」

アイシア「ええ！？悪いよ！」

義之「道すがらだし、どうせ隣の部屋なんだし、構わないさ」

そうアイシアの部屋はさくらの部屋の隣なのだ

と、その時

？「桜内さん、アイシアさんの荷物は私が持ちますよ」

と優しい声が聞こえた、声の聞こえた方向を見るとそこにはメイド服を着た物腰の柔らかい女性が居た

麻耶「あら、美冬調子はどう？」

美冬「はい、オールグリーンです」

どうしてこんな言い方かというと美冬はロボットなのだ

正式名称はH M I A 0 8 型 美冬みふゆといい現在初音島で広く普及して

いるロボットμ《みゆー》のオリジナルなのだ、ただしこちらは普及しているのとは違い感情モーションのリミッターが外されているので普通の人間と応対などがほとんど変わらないのである

義之「美冬さん、ありがとう」

美冬「いえいえ、それより早くさくらさんのところに行って下さい、大分お困りの様子でしたよ？」

義之「はい、わかりました」

麻耶「それでは」

アイシア「義之くん、麻耶ちゃん、またね」

義之達はアイシアを美冬に任せて先に進んだ

そしてしばらく歩くと目の前に木製の立派な扉が見えて扉の上には

<大統領執務室>と書いてある

義之「相変わらず立派な扉で」

義之はそう言いながらノックをすると中から

?「あ、義之くん?入って入って」

と言う声が聞こえたので、義之は扉を開けて

義之「失礼します!初音島統合防衛軍特務隊ワルキューレ隊長桜

内義之大佐!」

麻耶「及び副官沢井麻耶少佐出頭しました!」

と2人そろって敬礼しながら名乗った

すると

?「もう硬いよー2人共?いつもどおりでいいのにー」

と2人の前に金髪でツインテールそして碧眼が特徴の小柄な女性が

走ってきた

義之「これは礼儀みたいなものですよ」

麻耶「そうですよ?さくらさん」

そうなにを隠そうこの10代前半の子供にしか見えない人物こそ初

音島大統領芳野さくらその人なのだ

義之「で、あれはどういうことですか?土見訓練生を採用しても実

戦部隊に入れるなっつのは」

さくら「うにゃー、それは・・・」

とさくらがしゃべりにくそうにしていると

?「それは」

?「俺達から説明させろや」

義之は声のした方向を見ると2人の男性が居た、ただしそれは人族ではなく

麻耶「神族と魔族？」

そうその2人は神族と魔族なのだ

義之（この2人どこかで見たような？）

義之がそう内心首を傾げていたら

？「おっと自己紹介が遅れたね、私はフォーベシイ魔界で王をやらせてもらっているよ」

と黒い服を着た、耳が異様に長く全体的に線が細い男性が言う

？「俺はユーストマだ、神界で王をやってる、まあよろしくな」

と着流し（和服の1種）を着たガタイのいい魔族ほどではないが耳の長い男性が名乗った

義之「自分は初音島統合防衛軍特務隊ワルキューレ隊長桜内義之大佐であります！……え？」

麻耶「私は同部隊の副官沢井麻耶少佐であります！……え？」
義之＆麻耶「えええー！……！！？」

2人は敬礼した状態で驚いた

義之（そうかこの2人資料で見たんだった！）

麻耶「王様でありましたか！失礼しました！！」

魔王「いやいや、私達も自己紹介していなかったからね」

神王「気にするな嬢ちゃん」

そう2人は笑いながら言った

義之「で御2人が居ることが先ほど言っただけの説明に繋がるんですね？」

神王「おう！その通りでい！」

魔王「察しが良くて助かるよ」

さくら「まあとにかく座ろうか？」

そうさくらに促されたので全員ソファに座った

因みに席順は右側に義之・さくら・麻耶で左側に神王・魔王だ

義之「で、御2人とも土見訓練生を実戦部隊に入れるなっていうのはどうですか？」

神王「あー」

魔王「それはだね・・・」

と2人が喋りにくそうにしていると

義之「そもそも、わかってるんですか！？貴方達、御2人がやるうとしてるのは条約違反ですよ！？」

条約とは今から8年前に人族・魔族・神族の交流都市を世界中に作った際に制定されたもので、その内の1つに＜魔法の軍事転用は禁止（医療は別）＞とありそれに付随する形で＜神族と魔族は如何なる理由があるうとも軍に介入することを禁ずる＞とあるのだ

神王「まあ、そうなんだがな・・・」

魔王「これには訳があつてね・・・」

義之「訳ですか・・・お聞かせください」

神王「うむ、実はうちの娘のシアと」

魔王「私の娘のネリネちゃんかね」

神王＆魔王「土見稟ちゃん（殿）のことを好きになつててね（なつちまつててな）」

麻耶「それって、つまり・・・」

神王＆魔王「次期王様候補さ（だ）！」

義之＆さくら＆麻耶「なにーーーーー！？」「」

部屋が揺れるくらいに3人の叫びが響いた

流石に3人揃つて驚いたようだ

義之「確かに、それは出しにくいですね・・・」

義之も流石に唸るしかなかった

魔王「頼む！」

神王「たつた1人の娘の願いを叶えてやつてくれ！！」

なんと2人の王は義之に対して土下座までしてきた

義之「ちょ！？頭を上げてください！王がそんな簡単に頭を下げないでください！」

義之も流石に慌てて2人に頭を上げるように促した

魔王「じゃあ、聞いてくれるのかい！？」

2人の王は嬉しそうに頭を上げて義之を見た

義之「いえ、流石にそれは・・・、それにせつかく見つけた新人ですし、なにより・・・」

神王「なにより？」

義之「これは彼の人生です、彼が望んで訓練生に、軍人になると決めたんです、我々にとやかく言う権利はありません」

それを聞いた神王と魔王は、ハツとしたように

神王「すまねえ・・・」

魔王「少し焦りすぎたようだね・・・」

義之「いえ、御2人のお気持ちもわかります」

と義之が言い全員が悩んでいると

麻耶「そうよ！義之！総戦技演習よ！！」

義之「そうか！その手が有った！」

義之は麻耶の言葉を聞いて思い出すように手を打った

魔王「なんだい？」

神王「その総戦技演習ってのは？」

義之「正確には、総合戦闘技術演習と言います」

麻耶「総合戦闘技術演習は簡単に言くと、訓練生の卒業試験でして」

義之「その最終日に面接があるんです、その時に自分が直接言います」

魔王「ネリネちゃん達のことをかい？」

義之「はい、それで土見訓練生に直接選んでもらうなら、御2人も

文句は無いですね？」

魔王「そうだね」

神王「ああ、ねえな」

義之「よかった、じゃあ麻耶頼んだ」

麻耶「ええ」

麻耶は返事をするとき携帯端末を操作した

魔王「なにをしたんだい？」

義之「データを書き換えて自分が面接官というふうに変更しました」
神王「おいおい、それはいくらなんでもやり過ぎじゃあないんか？」

さくら「うにゃー、そうでもないんだよ、ワルキューレ隊は表向き大総統直轄つてなってるけど」

神王「けど？」

さくら「じつは僕の直轄部隊でもあるんだよね、にしても義之くん、やるなら言つてよね？」

気付くとさくらの手元には球状のフルカスタマイズの空中投影式キ―ボードと空中投影式モニターが展開していた

義之「すいません、さくらさん」

どうやら義之がやった事をさくらが許可したらしい

魔王「つまり君達には大統領並みの権限があるってことかい？」

義之「まあ、そうですね、あまり使いませんが」

と言うと義之と麻耶はソファから立ち上がり

義之「では我々は職務がありますので、失礼します！」

と敬礼して部屋を退出した

神王「若いのにいい眼をしてるじゃねえか」

魔王「そうだね、優しく、力強い意思、何より覚悟を持っている者の眼だね」

さくら「にゃはは、それは当たり前だよ、義之くんはく初音島の守護神なんだから」

運命の分岐点 side 軍（後書き）

はい、親ばかズとのファーストコンタクト完了です！！
ようやくここまで来たぜ、長かった
ってわけで

ここからは後書きコーナーダゼ！！

作者「はい、始まりました！このコーナー司会は私、けいゆうき京勇樹と」
雪音「アシスタントの、たはらゆきね田原雪音でお送りします」

因みに前回壊れた穴は補修済み

作者「では、本日のゲストはこの2人だ！」

義之「呼ばれたから来ました、さくらいよしゆき桜内義之です」

麻耶「ここに来たのは初めてね、さわいまや沢井麻耶です」

作者「はい、主人公とその恋人です！！」

雪音「狭くてごめんね？」

義之「いえいえ」

麻耶「で呼ばれた理由はなに？」

作者「はい！御2人にこれを読んでいただきたくて
とゲストに紙を渡す作者

義之「これを？」

麻耶「読むの？」

雪音「ええ」

作者「では、どうぞ！！」

麻耶「お願い、無事に帰ってきて・・・」

義之「うあーーーーー！！」

作者通信役「米国宇宙総軍よりハイヴ攻撃中の全部隊へ通達、至急
回避せよ、繰り返す、至急回避せよ、米国宇宙総軍は新型の対ハイ
ヴ兵器の使用を決定した、攻撃範囲内より至急回避せよ」

義之「もう・・・、この町で、誰も、誰も死なせたくないんだー
ー！！」

作者「はい、おつかれさん」

義之&麻耶「・・・（顔真つ赤）」

雪音「あら顔真つ赤」

作者「初々しいねー」

ジャキ！

作者「あれ？なに銃抜いてるの？しかも38口径の拳銃を」

麻耶「なにやらせるの・・・」

義之「この野郎はー！」

ドドドドドドド！！

作者「甘いわ！」

○トリックスの○オやエー○エント並に避ける作者

義之「なに！？」

麻耶「全弾避けた！？」

作者「ふははは！命中率85%回避率99%、Nタイプ評価Aを舐めるな！」

雪音「これは作者がZガンダムで実際に叩き出した評価です」

義之「なんて、出鱈目な回避率！」

雪音「また壁が壊れた・・・」

作者「まあ次回には直ってるよ、ってな訳で」

雪音「今回はここまで」

全員「・・・またねー！！！！」

作者「引き続き要望、アドバイス等お待ちしています！相変わらず
1通も来ないからさびしいです・・・」

運命の分岐点 *side* 学校（前書き）

今回は難産でした、時間が掛かってすいませんでした

運命の分岐点side学校

?side

?「みんな、おはよ・・・」

今日、私、八重桜^{やえさくら}は今日いつもの様に学校に登校して教室に入って驚きました、だって

?「ここは、何時から女子高になったのだ?」

そうなんです、教室に居るのは女子だけで男子は誰1人として居なかったのです

あ、因みに先ほど私の代わりに言ってくれたのは、いつもの様に一緒に登校した天枷美夏ちゃんです

?「おはよーなのですよ、さっちゃんに美夏ちゃん♪」

そう挨拶しながら近づいてきたのは右目が赤で左目が青のオッドアイが特徴でクラスメイトの麻弓^{みどり}タイムちゃんです

美夏「で、麻弓^{みどり}ようしてこうなったのだ?しかもあの変態メガネまで居ないとは」

と美夏ちゃんは麻弓^{みどり}ちゃんに質問しました、因みに美夏^{みどり}ちゃんが言った変態メガネとはクラスメイトの緑葉樹君^{みどりばいつき}のことです

麻弓「あのね今日転校生が来るって皆職員室に行っちゃったのですよ」

と言いました

美夏「ふむ、確かに風紀委員会でも話題になってたな」

と美夏ちゃんが言いました

桜「へー、そういえば前に麻弓^{みどり}ちゃんが教えてくれたよね」

私は以前登校した際に麻弓^{みどり}ちゃんが言った言葉を思い出しました

美夏「だからといって、男子全員が居なくなるとは・・・」

麻弓「それがね美夏ちゃん、その転校生凄^{すご}い極上なのですよ!しかもさっちゃんクラスの!」

と麻弓^{みどり}ちゃんは私を指差しながら言いました、麻弓^{みどり}ちゃん人を指差

すのは・・・って!!

桜「私はそんな極上じゃないよー!」

私は必死に反論しましたが

美夏「何を言う八重、八重は十分極上だぞ」

麻弓「そうなのですよ! さっちゃん知らないだろうけどファンクラブまであるんだから!」

うう、噂には聞いてましたが本当に存在したなんて・・・

桜「それを言うなら美夏ちゃんや麻弓ちゃんだって十分極上ですよー!」

と私は必死の反抗を試みましたが

美夏「いや、八重には負ける」

麻弓「さっちゃんには負けるのですよー」

と一蹴されました、うう・・・

とその時チャイムが鳴ると同時に教室のドアが開き

? 「いやー、世の中は広いね、まさか桜ちゃんクラスの極上がまだ居たとは!」

と眼鏡をかけた男子、緑葉樹君が言いました、うう・・・また言われた・・・

? 「たく! 今回は見逃してやらんでもないが、お前ら次やったら問答無用でタイヤ引きグラウンド50周させるからな!」

と言いながら入ってきたのは腰まで伸びた綺麗な黒髪にスタイル抜群の担任の、紅薔薇撫子先生べにばらなつこの通称、紅女史べにじょしです

? 「あははは、皆さん席に着いてくださいね?」

と次に入って来たのはサイズが合っていないのかダボダボの大きい服と、同じようにサイズが合っていないのかすぐにズレル眼鏡をかけた女性で副担任の、山田真耶先生やまだまやです

因みに学校のグラウンドは平均して1キロあり、最大だと陸上競技が練習できるようにと5キロまであります

紅薔薇「さて!、既に知っている者も多いと思うが今日からこのクラスに新しい仲間が加わる!」

と撫子先生が行ったら男子が全員クッカードを出しました、何処からだしたんでしょうか？

紅薔薇「さて、では入れ！」

撫子先生が行ったらドアが開きました、その瞬間男子が一斉にクッカードを鳴らしました

？「おう、なかなか面白いクラスみたいじゃねえか、なあまー坊？」

？「そうだね、神ちゃん《しんちゃん》このクラスなら楽しく過ごせそうだね？」

入って来たのは2人の男性でした・・・あれ？

桜「麻弓ちゃん、この2人が転校生？ 個性的って意味では確かに極上だけど・・・」

私は後ろの席の麻弓ちゃんに聞きました

麻弓「ぶんぶんぶん！ 違う違う違う！！」

と麻弓ちゃんは高速で首を振りました

桜「緑葉君？」

私は次に右斜め前に座っている緑葉君に聞きましたが

樹「そ、そんなわけないって！？」

と緑葉君は即答しました

真耶「な、なんで御2人が来るんですかー！？」

山田先生は混乱しながら聞きました（まるで子犬みたいです）

？「いや、なに、シア達が過ごすクラスがどういうクラスか気になっただけ」

？「うん、ついでに釘を刺そうかと思っただけ」

真耶「釘ですか？」

なんででしょうか？

？「いいからお前ら！ シアとネリっこには婚約者が決まってる！」

と言ったのは着流しを着たガタイの良い神族の男性でした、もう婚約者が決まってるんだ！

？「もし、その仲を引き裂こうなんて考えたら、分かってるよね？」
そう言ったのは魔族の男性の顔は笑ってましたが・・・

クラス男子一同「サー・イエツサー!!」「」

と男子全員が一系乱れずに返事しました、気持ちは分かるよ、だって……怖いんだもん

?「お・と・う・さ・ん!」

?「おご!」

ドゴ!

という音とともに神族の男性の頭が横にズレました、なんで?

?「シア、椅子はやり過ぎだつて教えただろうが?」

神族の男性が後ろを向きながら言いました

え?椅子?

?「普段血の気が多いからこのくらいがちょうどいいんです!!」

と両手にパイプイスを持った腰まで髪が伸びた神族の女の子が居ました、まさかあれで殴ったのかな?

?「お父様もやり過ぎです、クラスの方々が怖がつてるではありませんか」

と魔族の男性の横に腰まで伸びた髪と胸の大きい魔族の女の子が居ました、……かわいいです

?「いやー、ごめんねネリナちゃん、ネリネちゃんの恋を応援したくてつい」

娘さん思いのお父さんです

?「おい、そういやあ嬢ちゃんはどうした?」

あ、そういえば3人って話でしたね、3人全員このクラスに入れるつてのはやり過ぎなんじゃ

?「そうだね、このクラスに知り合いが居るって言うから入れてもらっただけ」

へー、知り合いですか、誰でしょうか?

?「あれ?そういえばカエちゃん?」

と神族の子が周囲を見回しました

?「あら?カエデさんは?」

え?かえで?そんな……ただの偶然のはず……

美夏「む？どうした八重？そんな顔して」

麻弓「そうなのですよ、まるで幽霊でも見たような顔しちゃって」
だって、楓ちゃんは2年前に死んだはずなのに……

？「ほーら！カエちゃん、早く入るの！」

と神族の子がドアの所から1人の手を引っ張ってます

？「あ、あの！シアちゃん！？まだ心の準備が！！??」

え……？この声は……

クラスに入って来たのは明るい茶髪を肩のあたりで切りそろえた赤いリボンがトレードマークの女の子でした……

紅薔薇「それで、そろそろよろしいでしょうか？」

撫子先生の顔は笑顔でしたがプレッシャーが凄いです……

5人「……はい……」「……」

閑話休題

シア「リシアンサスです、少し長いのでシアって呼んでほしいです！」

クラスの男子のボルテージが高いです

ネリネ「ネリネと申します、よろしければリンとお呼びください」

礼儀正しい子です

神王「俺の名前はユーストマだ！シアの父親でもあるし神界の王をやってる、よろしく頼むぜ？」

え？

魔王「私の名前はフォーベシイ、ネリネちゃんの父親であり魔王でもある、見知っておいてくれたまえ」

はい？

紅薔薇「御2人は結構です、それにまだ1人終わってません！！」

撫子先生ふようかえでご苦労様です

楓「芙蓉楓ふようかえでと申します、よろしく願いします」

ガタン！！

美夏「どうしたのだ、八重？」

麻弓「どうしたのですよさっちゃん？」

美夏ちゃん達がなんか聞いていましたが、今の私の耳には聞こえて
ませんでした

楓「桜ちゃん、・・・お久しぶりです」

楓ちゃんは優しく微笑みながら言いました

桜「楓ちゃん！」

私は楓ちゃんの駆け寄り抱きつきました

真耶「ちょ！？八重さんいきなりなんですか！？」

神王「あー、止めるなよ先生さんよ？」

紅薔薇「どういうことですか？」

魔王「この2人はね、2年ぶりに再会したんだよ、しかも楓ちゃん
は死んだことになってる」

クラス一同「「「「え！！？」「「「「」

神王「まあ、詳しくは嬢ちゃん達に聞きな」

魔王「それではこれにて・・・」

と去ろうとしたら

麻弓「ちよつと待つて欲しいのですよ！？先ほど御2人の口からな
んか、とんでもない発言があつた気がするのですよ！？」

撫子先生はやつぱりなという顔をして

紅薔薇「えー、まあ・・・、そういうことだ・・・、非常に残念・
・じゃなくて、非常に嘆かわしい・・・でもなくて」

撫子先生本音が出てます

紅薔薇「非常に信じられないことではあるが・・・、この御2人は
それぞれ神界と魔界の王の立場にあるお方だ。そして転校生はその
娘さんと友人・・・私の言いたい事は分かるな？緑葉？」

撫子先生は樹君を見ました

樹「もちろん。大丈夫ですよ。俺様が必ず幸せにしますから！！」

と樹君は右手の親指を立てながら言いました

紅薔薇「お前は一切近づくなと言ってるんだよ!!」

撫子先生から凄い殺気を感じました

紅薔薇「あー、次の時間だが自習にする、麻弓、後は頼んだ」

と撫子先生は教室から神王と魔王の2人を押し出しながら去り、山田先生はその後を着いていきました

そこからは質問攻めでした

そして昼休みです

私達は屋上でお弁当を食べながら話してました、すると

？「楓が生きてたって本当!？」

そう言つてドアを凄い勢いで開けたのは緑の髪をショートカットで切りそろえて左前に一房だけある前髪をリボンで纏めた女子の先輩です（制服のリボンの色が違うので分かります）

楓「お久しぶりです、亜沙先輩」

そう楓ちゃんが挨拶すると

亜沙「楓ー!」

と亜沙先輩こと、時雨亜沙先輩は楓ちゃんに抱きつきました

楓「すいません、ご心配をおかけしました」

亜沙「本当だよ!？なんで連絡の1つもくれなかったの!？」

楓「すいません、怪我の治療とリハビリに時間が掛かりまして」

亜沙「怪我って・・・」

？「それについては私から説明します」

と現れたのは膝まで届きそうな金色の髪に青紫の瞳が印象的な神族の女子の先輩でした

桜「あなたは確か生徒会長の」

瑠璃「瑠璃^{るり}マツリと申します、楓さんは2年前のタイタン戦争の時に左手を肘の辺りから失っており、気絶しているのを私が発見し保護しました」

私達は驚きました、だって

桜「え!？でも左手普通に有るよ!？」

そうなんです左手が普通にあつて、しかもちゃんと動いています？「それは神界の医療技術のなせる業ですわね」

と声が聞こえたので見るとドアの辺りに輝く程の金色の髪が腰の辺りまで伸びていて右前に亜沙先輩と同じようにリボンで髪を纏めている緑色の瞳が印象的な神族の女子の先輩が居ました

亜沙「あ、そういえばカレハも居たっけ」

あー、お料理部の双璧の

瑠璃「発見した後、神王様に頼んで治療を施していただきました」

楓「それで、リハビリに1年近く掛かったちゃいました」

瑠璃「しかも、人間界こちらの日本では楓さんは死んだことになっていて更に桜さんや稟殿は初音島に移住なさってましたから探すのに苦労しました」

桜「え！？稟君を知ってるんですか！？」

瑠璃「はい、私は光陽学園の出身です」

桜「あ、じゃあ、・・・あの噂も？」

私は恐る恐る聞きました

瑠璃「はい、存じてますが、楓さんから全て聞いてますので、ご安心ください」

良かったー

瑠璃「それで楓さんはリシアンサス殿下と一緒に人間界に来たんです、私はすぐに初音島に移住しましたが」

なるほど

亜沙「でも稟ちゃんはこの学園には居ないよ？」

桜「そうなんです、私ですら1年以上会ってすらいないですし・・・」

亜沙「え？そうなの？」

ネリネ「それなら大丈夫です」

桜「え？どうして？」

シア「稟君の居場所なら知ってるっす！」

桜「え！？本当ですか！？」

ネリネ「稟様は訓練校に居ます」

訓練校？

樹「それって、統合軍の訓練校のことかい？」

桜「え！？稟君、軍隊に居るの！？」

ネリネ「はい、以前お父様が交渉に行っていました」

桜「交渉？」

シア「うん、でも確か特務隊の隊長さんと話し合って終わったって
言ってたっす」

美夏「なに！？」

エリカ「隊長と！？」

由夢「兄さんと！？」

桜「え！？3人とも知ってるんですか！？」

美夏「む・・・」

エリカ「え、えーと・・・」

由夢「そ、その・・・」

ジーーーー×複数

由夢「仕方ないですね、このことは口外無用でお願いします」
やった根勝ち！

由夢「まず特務隊隊長は私の兄さんの、桜内義之兄さんです」

桜「え！？由夢ちゃんのお兄さんって隊長さんだったんだ！しかも
あの英雄！？」

まさかく初音島の守護神>さんがお兄さんとはビックリです！

由夢「ええ、しかも私達はその特務隊に所属しています」

軍隊に所属してるのは知ってたけど、まさか特務隊とは・・・

由夢「それで、先ほど言ってた、土見訓練生ですが、兄さん達が目
をつけてまして」

亜沙「ってことは特務隊に入れるってこと？」

由夢「はい」

桜「早く会いに行かないと！」

美夏「待て！今は無理だ！」

桜「なんですか？」

エリカ「今、訓練生は総戦技演習真っ最中なんです」

亜沙「総戦技演習？」

「なんですかそれ？」

由夢「正確には総合戦闘技術演習と言いまして、訓練生の卒業式みたいなものなんです」

なるほど

美夏「総戦技演習は1週間かけて行われるんだが、今はちょうどその期間中なんだ」

桜「なるほど、だから今行っても会えないってことなんですね」

由夢「それに期間が終わっても会えるかどうか・・・」

桜「どうですか？」

由夢「特務隊ですから、秘匿性が高いので、情報漏洩を防ぐために面会もかなり制限されてるんです」

桜「そんな・・・」

由夢「私の名前を使えば面会できるかもしれないですよ・・・」

美夏「まあ、奥の手で同じ部隊に所属するという考えもあるな」

楓「そんなことが可能なんですか？」

由夢「まあ短期課程を優秀な単位で卒業すれば可能ですが・・・」

桜「なるほど・・・」

私は楓ちゃんのほうを見ました、どうやら楓ちゃんも同じ考えに至ったようで眼が合いました・・・

楓＆桜（稟くん待っててくださいね？）

私達は青空を見上げました・・・

運命の分岐点 side 学校（後書き）

今回は長かった……

はい後書きコーナーですよ！

作者「はい、どうも作者の京勇樹です」

雪音「アシスタントの田原雪音です」

前回穴だらけになった壁は補修済みです

作者「今回のゲストはこちら！」

冥夜「御剣冥夜だ」
みづるぎめいや

まゆき「高坂まゆき《こうさかまゆき》です」

音姫「朝倉音姫です」
あさくらおとめ

作者「いやー綺麗な花ばかりで」

雪音「本当に」

音姫「あはは、綺麗だなんてお世辞でも嬉しいな」

作者「いえ、お世辞ではありませんよ、では今回はこれをお願いします！」

まゆき「なになにこれを読むの？」

雪音「はい頼みます」

ではスタート！！

音姫「およしなさい、イルフリーデ！もう間に合わないよ……」

まゆき「そんなのやってみなくちゃわからない！！」

冥夜「馬鹿者！この様な……力押しなぞ！！」

まゆき「お願い行かせてヘルガ！人類はまだ戦っている、諦めるなんて絶対に出来ない！！」

作者「はい、おつかれさま」

雪音「どうでした？」

音姫「うん、たのしいねこういうの」

まゆき「うん、なんか新鮮だね」

冥夜「・・・のだ」

作者「うん？なぜに刀を皆瑠神威を抜くのかな？」

冥夜「なぜ私が上官を馬鹿者呼ばわりせねばならんだ！！」

作者「あぶね！」

壁が切り裂かれて刃が作者に向かう

冥夜「なに！？真剣白刃取りだと！？」

作者「ふはははは！俺は格闘家でもあるのだよ！」

雪音「これは事実です、作者は空手にテコンドーにムエタイに八極拳に合気道に柔道に八卦掌を使います」

まゆき「なにその1人多国籍軍は！？」

音姫「ワルキューレでも十分隊長格で行けるね・・・」

作者「また壁が壊れたよ・・・」

雪音「まあいつものように直るでしょ、では今回はここまで！」

全員「「「「また次回まで、さよーならー！」「」「」「」

引き続き要望や、ご意見感想などをお待ちしております、相変わらず1通も来ないので寂しいです・・・

設定（前書き）

設定ですよ

まずはキャラで

設定

桜内義之^{さくらい よしゆき}、初音島統合防衛軍特務部隊ワルキューレ隊の現隊長、コールサインはオーデイン1、階級は大佐、現在の搭乗機はGAT-X105ストライク、副官の、沢井麻耶^{さわい まや}とは恋人同士である、元は空軍の戦闘機パイロット候補生で優秀な生徒だったが、タイタン戦争数ヶ月前にMSパイロットに転科した

沢井麻耶^{さわい まや}、初音島統合防衛軍特務部隊ワルキューレ隊所属、コールサインはオーデインマム、階級は少佐、主には、CPこと通信^{コマンドポスト}を担当、指揮官適正も高いため現在艦長育成コースも勉強中メカニックも兼任しており整備班の班長でもある

朝倉音姫^{あさくら おとぎ}、初音島統合防衛軍特務部隊ワルキューレ隊所属、階級は大佐、特装艦アークエンジェル^{アークエンジェル}の艦長を勤める、柔軟な指揮に定評がある、容姿端麗、成績優秀であるが、義之にはとことん甘いのである、高坂まゆきとは友人関係

伊隅みちる^{いすみ みちる}、初音島統合防衛軍特務部隊ワルキューレ隊のMS隊副隊長を勤める才女、コールサインはオーデイン2、階級は中佐、搭乗機はGAT-X303イージス、何より努力することを怠らず、今の力も彼女の努力によるものである、結構完璧主義である

高坂まゆき^{たかば まゆき}、初音島統合防衛軍特務部隊ワルキューレ隊所属、コールサインはオーデイン3、階級は中佐、搭乗機はGAT-X102ASことデュエル^{アサルトシュラウド}AS、アークエンジェル艦長である朝倉音姫^{あさくら おとぎ}とは旧知の間柄であり、義之や音姫の妹である、朝倉由夢とも友人である、運動神経は抜群で、訓練生時代は男子女子問わずに高い人気を誇っていて、非公式にファンクラブまで存在している

杉並、初音島統合防衛軍所属であり、以前はGAT-X207ブリッツのパイロットであったが、<初音島防衛戦>で機体が被弾しほぼ大破状態になりその際に負傷しパイロットを引退した。階級は少佐、現在は諜報部に所属していて滅多に姿を見せない

橘菊理、初音島統合防衛軍特務部隊ワルキューレ隊所属、階級は中佐、搭乗機はGAT-X103バスター、コールサインはオーディーン4、長い黒髪に大きな目にちよつと広い額が特徴である、物腰が柔らかく、いつも柔らかい微笑みを絶やさない、ラウンス隊に所属している、皐月駆と付き合っている

土見稟、現在訓練生で、206訓練部隊に所属している、2年前の<タイタン戦争>で幼馴染である、芙蓉楓が死んだと思い込み、無力な自分が許せなくて、初音島統合防衛軍に志願した、八重桜とも幼馴染である、右手首に楓が結んでいた赤いリボンを巻いている

芙蓉楓、2年前のタイタン戦争で左手を失う重傷を負い気絶していた所を、瑠璃マツリに保護される、その後は神界にて治療を受けて、リハビリを兼ねて神王に仕えていたため家事スキルに磨きがあり、もはや一流である

八重桜、現在は初音島総合学園高等部普通科2年C組に所属している、クラスメイトの天枷美夏とは仲がよく、登校するさいは何時も一緒に登校する、2年前に楓が死んだと思い込んでいたため、再会した時は泣いていた、趣味は人形作りで、スタミナが異様に高く、陸上競技の持久走ではいつも上位にランクインしている、家事スキルは高い、稟のことが好きだがなかなか告白できないでいる

朝倉由夢、初音島統合防衛軍特務部隊ワルキューレ隊所属、普段は

アーケエンジェルの衛生班に所属しているが、予備MSパイロットでもある、階級は准尉、朝倉音姫は姉であり、桜内義之とは兄妹同然に育ったため、義之のことを兄さんと呼ぶ、総合学園では八重桜と芙蓉楓とクラスメイトで、天枷美夏、エリカ・ムラサキとはクラスメイトであり、訓練部隊の同期でもある

搭乗機はアストレイ3型スナイパーカスタムが多いが基本オールレンジ対応のオールラウンダー

出撃する際のコールサインはアテナ4

設定（後書き）

今回は設定を書きましたが、今後ちよくちよく追加で書く予定です
今回都合により後書きコーナーはお休みいたします

設定その2（前書き）

設定その2ですよ

今回は世界の状況をお送りします

設定その2

海洋中立独立国家初音島

新太陽暦20年に日本帝国から独立した中立国家、当初は三日月型の島の初音島のみだったが、月島財閥の出資によりメガフロートを建設して国土を広げた

最初の代表者は工藤叶の祖母だった、しかし一族の世襲式だと歪みが発生してしまうと判断して次代からは選挙式になった

なお初音島統合防衛軍は志願式の為、脱走者は滅多に出ない

主な主力機体は現在M1アストレイの後継機のアストレイ2型

JEU

日本帝国とEUこと欧州連合が同盟を結んで誕生した

しかし新太陽暦73年3月にユーラシア連合が武力により制圧

1部の者達は脱出して現在逃走している、そのうちの1部が初音島に亡命している

ラウラ・ボーデヴィツヒは祖国を守れなかった自分の無力さが許せなくて志願したもよう

日本帝国は徴兵式だが脱走者は無し、EUは志願式の為脱走者は無し
日本の主力機は一般は、烈空れっこうと近衛軍は烈空の改良機の、蒼空そうくうと、
新型機しゅしやうきの、龍閃りゅうせん

EUの主力機はコロニーにて生産されたZGMF-1017ジンを改良して空戦能力と火力を強化したジン・トーナードとAMF-101ディンの強化機のディン・ラファールをライセンス生産している

ユーラシア連合

人口が爆発的に増えすぎた中国をロシアが吸収した形で生まれた巨大国家

しかし、貧富の差が激しく国家内では凶悪犯罪が多発しており、治

安は最悪

軍は徴兵性になっているが、脱走兵が多い、更には1部で強化人間計画も持ち上がっているようだ

主な主力機は前大戦期のストライクダガーの後継機のダガーⅠと現在ウィンドムが続々とロールアウトしている

N・A・U ネオアメリカ連邦

アメリカ合衆国が中心となり、カナダ、南アメリカ大陸の各国が1つになって生まれた

治安は良好で、貧富の差は大してない

軍は志願式で脱走は無し、優秀ならば黒人だろうと重用するため人種差別は1部はないが、未だ根強い

主力機は前大戦のリーオーの強化改修のリーオーMk?と同じく強化改修したエアリーズMk?

アフリカ共同機構

アフリカ大陸の国家が集まってできた

砂漠の緑化計画により砂漠は減少したが未だに残っている

スラム街があるため治安は悪い

軍は徴兵式だが脱走兵は少ない

主力機はジンの砂漠対応型のTMF/S-3ジン・オーカーとTMF/A-802バクウとバクウの技術を流用したティエレンタイプと最近ロールアウトしたバクウの改良機のTMF/A802W2バクウ・ケルベロスハウンド

赤道連合

赤道下にあった島国が合併して生まれた

各島に自警団がいるため治安はそれなり

軍は志願式の為脱走兵は無し、しかし他の国に比べると数は少ない
中立国家

主力機はユーラシア連合の払い下げのストライクダガーを改良して使っている

オーストラリア合衆国

オーストラリア諸島が合併して生まれた国家

治安はかなり良い、経済的にもかなり潤っている

軍隊は少なく、非常時には国民皆兵制度により徴兵され義勇軍として機能する

主力機はVMS-15リアルドと最近ロールアウトしたSVMS-01フラッグである

後はどの国家にも所属していない独立国が多数存在する
主力機は様々

設定その2（後書き）

今回も後書きはカットします

設定その3（前書き）

設定その3です

今回は作者オリジナルMSの紹介です

設定その3

MBF - M1TYPE2 アストレイ2型

17・54m

53・6t

固定武装

頭部75mm対空自動バルカン砲システム イーゲルシュテルン

腰部70式改ビームサーベル

主な違いは背部に準ストライカーシステムを搭載して色んな戦局に対応が可能になっており、今存在しているストライカーパックは

アサルト
強襲襲撃パック

スナイパー
超遠距離狙撃パック

キャンノン
遠距離支援砲撃パック

フライト
空戦パック

となっている、更に装甲も新しい発泡金属になっており重さは大して変わらず防御力は向上している

更にOSも、とある人物が考案した新型の物に交換しており即応性が3割上昇している

現在の初音島統合防衛軍の主力機

MBF - M1TYPE3 アストレイ3型

17・53m

53・2t

固定武装

手首装甲収納式72式ビームサーベル

頭部バルカン砲を固定式にせずにオプション式に変更した（イメージ的にはZガンダムのガンダムMk-2）更にビームサーベルを手

首の装甲に収納式に変更して取り出し時間を短縮する目的で考案された（イメージ的にはユニコーンガンダムのRGZ-95リゼル）更に背部だけだったストライカーパックシステムを全身にした、その際に装甲をブロック式にして整備性の向上も成功した、ストライカーパックは2型と共通で使用可能でパイロット1人1人に合わせて更に装備を変更可能になっていて個人専用機にもなる

現在試験評価中で配備されているのはワルキューレ隊のみで

MVF-M11Cムラサメと一緒に評価試験されている

ZGMF-1017/T ジン・トーナード

21.41m

85t

固定武装

背部フライトユニット兼用多目的ミサイルランチャー

腰部 折りたたみ式ハルバート

選択式武装

MMI-M8A3C80mm重突撃機銃

MK-71 120mm突撃長距離支援砲

脚部取り付け式 3連装ミサイルランチャー

380mm無反動バズーカ

L4コロニー群で生産されたMS ZGMF-1017ジンをEUが独自改良強化してライセンス生産している機体、新太陽暦72年11月に近代化改修した、主な改良は頭部のセンサーユニットを新型の小型の高性能のものに換装して頭頂部のトサカを小さくして故障率を低減、更に大気圏内で空戦能力が無かったのを、背中に取り付けられてた大型スラスターをミサイルランチャー兼用のフライトユニットに換装した（イメージ的にはザクウォーリアのブレイズユニットにM1アストレイのシュライクユニットを合体させた物）、更に腰に装備されていたMA-M3重斬刀を折りたたみ式のハルバ

ート（重斧槍）に交換したことにより格闘攻撃力の向上を図った、それに合わせてマニピュレーターの関節強度を4割程上げた、更に支援能力を得る為に120mm突撃長距離支援砲を新規生産して、部隊運用性を向上させた

最近では強化機のリーダーと通信機能、スラスター推力が強化された
アドヴァンスト
ジン・トナーDADVがロールアウトされている

AMF-101/D-R デイン・ラファール

19・33m

37・9t

固定武装

胸部多目的6連装ミサイルランチャー

選択式武装

MMI-M8A3C80mm重突撃機銃

95mm対空散弾銃

380mm無反動バズーカ

MK-71 120mm突撃長距離支援砲

L4コロニー群で生産されたAMF-101デインをEUのフランスの軍需産業デュノア社が改修強化してライセンス生産している
主な回収は全身のスラスターを強力な低燃費のものに換装して推力を強化し、それに合わせて機体に内蔵されていたプロペラントタンクを大型化した
速度はデインよりも約2割強化、航続距離は飛躍的に強化された
スラスターが強化されたことに合わせて武装も強力なものを保持出来るようになった

MSJ-06?AICティエレン無限軌道型

18・3m

122t

固定武装30mm機銃

両肩部固定シールド

選択式武装

200mm×25口径長滑空砲

バッテリー内蔵式450mm単装レールガン

大型カーボンブレード

バッテリー式ビームサーベル

新太陽暦71年に製造されたティエレンにL4コロニー群で製造されたバクウの技術のレールガンとビームサーベルを追加武装で作った更に大きな変更として歩行式だったため遅かったのを早くするため脚部にバクウの無限軌道を採用して砂漠での機動力の強化を図った更にティエレンの地上バリエーションシリーズの脚部も無限軌道式に換装して機動力を強化した
なお選択式武装はティエレンシリーズの共通武装である

JMS-TYPE71（日本以外での表示） 71式MS 烈空^{れつくう}

18.5m

75t

固定武装

頭部 70mm対空自動バルカン砲

腰部 日本刀型近接格闘兵装 斬鉄刀

左腕部 小型ABシールド^{アンチビーム}

右手 71式ビームライフル

日本帝国が初音島からの技術提供により開発した国産MS、主に近接戦闘を重視しており、肩周りの装甲は他の国に比べるとスマートになっている、全体的に鎧武者をイメージさせる造形になっているカラーリングはダークグレーで統一されている、背部に飛行ユニット^{あすか}の、飛鳥ユニットを装着することにより空戦能力を得ている、翼の下にドロップタンクを装着することにより航続距離を延長できる、更に無誘導式8連装ミサイルランチャーと対艦大型ミサイルも装着可能

J M S - T Y P E 7 1 C (日本以外での表示)

7 1 式改 M S

蒼空そうくう

2 0 . 5 m

8 1 t

固定武装は烈空と共通

飛鳥ユニットも装着可能

7 1 式烈空を元にして作った帝国近衛軍専用機体

烈空より大きくなった理由はスラスターの強化や、内蔵式プロペラントタンクの大形化などが要因である

なお烈空よりも全体的に性能は高く、出自と階級によって色分けと機体性能が異なる

一般武家の出身は機体色は烈空と同じくダークグレーが基本色で烈空より推力は3割ほど高い

白は一般より少し階級が高い所謂、豪族生まれの機体で一般機より推力は2割ほど強化されていて、センサーも多少高性能なものを装備している、更に関節強度が2割増しになっていてより格闘戦を重視しているのがわかる

山吹色は中階級の生まれの機体で推力は白より1割高い程度である、関節強度は白より3割増しになっていてセンサーもより高性能なものになっている

赤は御3家に仕える者しか使うことを許されておらず、表示は蒼空高機動型と表示されるほどである、そのため推力は山吹色の3割り増しになっており関節強度も2割増しになっている、センサーは更に高性能のものを装備している

青は御3家しか搭乗できず機体の起動方式も網膜認証であるため完全に個人専用機である

推力は赤の2割増しで関節強度は3割増しとなっておりセンサーも最早別物と言っているほど高性能なものを装備している

紫は征夷大將軍専用機で機体の起動方式は音声認証に網膜認証とかなりのセキュリティになっている

機体性能は最早完璧別物で限界までチューンナップされている

これらの性能から分かると思うが生産性と整備性は度外視されている

JMS-TYPE 73（日本以外での表示） 73式MS 龍閃^{りゅうせん}

22m

82・8t

武装は全て烈空と共通

専用武装として72式ビームサーベル 春雷^{しゅんらい}が新規生産された

飛鳥・改が専用ユニットとして用意されている

機体性能は蒼空の一般機よりも全体的に3割り増しになっており

機体色の色分け及び性能の高低差はすべて蒼空に準じる

これまた生産性及び整備性は度外視して作られており、近衛軍専用機体として作られた

設定その3（後書き）

オリジナルMSを考えるのって大変ですね・・・
作者の頭脳フル回転1歩手前まで行って少し頭痛がします
後書きコーナーは今回も割愛させていただきます

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7601v/>

機動戦士ガンダム 英雄黙示録

2011年10月12日03時58分発行